夫れ斯の如く神はダニエルをして其光りを輝かさしめんため、彼をバビロンに送り玉ひし如く、吾等をも招き玉へるなり。何人も吾等に或人々の如き勢力なき故其光を輝すこと能はずと云ふものあらざれ。神の要め玉ふはたゞ汝の有する丈の力を用ゐんことなり。恐らくはダニエルも其始めてバビロンに下りし時には多くの力を有せざりしならむ。然れども彼が忠信にして其有てる力を用ゐしにより神は漸次大なる力を與へ玉ひしなり。且つ記憶せよ、微なる光にてもいと暗き場所にありては、其効用の少からざるを、汝若し大廣間の中央に一の燭光を置かば、是によりて多少其室を明ならしむるを得べきなり。

或僻遠の地方にて、其地の學校に於て集會の催ほされける折、今夜某所にて蠟燭の光にて集會を催ほすべければ、心あらむ人は用意して來られよとぞ報じける。斯くて始めに來りし一人燭を携へ來りて、是を机の上に置きぬ、固より是のみにて室を明るくすること能はざりき、然れど

もなきには勝りしなり。斯くて後より來るものも追々燭を持ち來りて、遂には室内をして明煌々たらしむるに至りぬ。斯の如く吾等も各其有てる光を輝かさば、遂には大なる光となりぬべし。縱し吾等をして燈明臺たる能はざらしむるとも、希くは一本の蠟燭たらしめよ。

僅かなる光りも時として大なることをなすなり。十萬の人をして其住家を失はしめし慘憺たるチカゴの大火も其起原を尋ぬれば、牝牛がランプを蹴たるにてありけり。汝大なる事を爲し得ざるの故をもて、何事をも爲し得ずと考ふる勿れ。人もし神のために何事も爲し得ざる時ありとすれば、船量に惱める折の如き是ならむ。爰に或航海中船量に惱みたりし人に就ての談話あり。彼が苦惱して打臥せる折、柄甲板の上より人の落ちたる物音しければ、是を救ふ由もがなと思ひ、有合せしランプを取りて砲門にかざしぬ。溺れし人は救はれぬ。彼れ苦悶去りて後甲板に出でゝ救はれし人の語るを聞くに、其人の沈まんとして手を上に擧

げし時、恰も砲門より燈火の是を照すものありければ、人來りて其手を捕へ是を救助船に引上げたるなりと。たゝランプをかざすことは眞に些事のみ、されども能く人の生命を救ひたり。汝若し大なる業を爲し得ずんば、彼の滅亡に陷るべき憐れなる人々のためにたゝ燈火を掲ぐることをせよ。もし自ら救はれながら人の亡びに行くを見て是を救ふことをせずば是れ恩を知らざるの甚しきものにあらずや。

或市街の偶に盲人の坐せるあり、其側に燈火を置けり。或人問ふて汝は瞽者なるに燈火を置きて如何にするやと云へるに、瞽者は答へて、通行人の余に躓くことなからんためなりと曰へりとぞ。思ひ見よ、聖書を讀むもの若し一人ありとすれば、百人のものは諸君と吾等を讀むなり。パウロが吾等は凡ての人に讀まるゝキリストの生ける書なりと云へるは是なり。吾等若し日々の生活によりてキリストを說くにあらざれば吾等の說敎は益なからむ。親切なる僅の行は澤山の長き說敎よりも人

を感ぜしむるに足るなり。

曾て一船あり、イリー湖上に於て暴風に遭ひ、クリヴランドの港へ入らんと勉めけり。其處には上の光り、下の光りとなん呼ばるゝ二個の燈臺ありて、其時上の光りは高き岸の彼方にいと明かに輝きたれども港に近くに迫び其港口を示すべき下の光の見えざるを發見せり。是に於て水先案內は復び湖上に引き返へすより他に策なしと思ひしが、船長は復び引き返へせば沈沒せんことと必定なりとて强いて港に入らしめんとせり。水先案內は船を何れに向くべきか、是を指示すものなければ港に入らん望み殆んどなけれども、止を得ざれば、たゞ力の及ぶ限りを盡しけり。霎時にして船は淺瀨に乘り上げ忽ちにして破碎せり。一人の光りを點ずることを怠りたるがために、幾多の人命を殞しぬ。夫れ神は變ることなく上なる光りを照し玉へり、而して其下なる光りを輝かさしめんがために吾等を地上に置き玉へるなり。キリストが上にありて吾

等を代表し玉へるごとく、吾等は下にありて彼を代表すべきなり。されば吾等は能く其光りを輝かして人をして暗きに歩まざらしむる樣なすべきにこそ。

燈臺の事に就て思ひ出すは數年前旅中に於て暴風に出遭ひしミチゾタ州の或人の談話なり。該州にては冬期折節俄かの暴風ありて大に人を惱ますことあり。雪は頻りに降り、風強く吹きて旅人の面を打ち、咫尺も辨ずる能はず、ために往々非命の死を遂ぐることあるなり。一旅客偶ま此難に遭ひ既に危ふくなりける所に、遙か彼方に燭光を認め、とある茅舍に辿り付き危く生命を拾ひけり、後ち此人其地を買ひ受け、是に立派なる家屋を建築し、其塔の上に燭を點じて旅客の難を救ふに便せり。是れ眞に恩を知るものゝ所爲と云ふべし。神の吾等に要め玉ふ所も是の如き而已。吾人若し恐るべき亡びの穴より救ひ出されたらむには、亦た他の是に趨く者を冷眼に看過すべきものならむや。

前に言へる如く吾等もし一人の靈魂にてもキリストに導くを得ば、是れ吾等が死後永遠に流るべき川の源を開けるなり。彼の滾々として流れ出づる山涯の泉を見れば一頭の牛も能く是を飲み盡し得べく思はるゝなり。然れども軈て溪流となり、他の幾多の溪流を合せ、遂には洋々として海に注ぐの大河となり、其兩岸には村落あり、市府ありて幾多の生民住み田畝は是によりて灌漑され、商業は是によりて交通の便を得るに至るなり。夫れ斯の如く、汝若し一人をキリストに歸せしめば、夫れより百人に迨び、百人より千人に迨び、其流れ愈廣く深くして以て永遠に至るべきなり。默示錄に記して曰く、今より後主にありて死する死人は幸なり、然り靈も云ふ、彼等は其勞苦より休むを得ん、而して其働き是に從はんと。

聖書中に記されたる人物中にて、其頗る長く世に存へたりしにも關らず、彼等は世にありたり、彼等は死せりと云ふの外更に人に知られざる

者も少からず。現時の基督教徒に就ても、吾等若し其墓誌を記さんとせば、たゞ其何時に生れ、何時に死せりと云ふの外何事をも記し能はざるもの多きなり。然れども善人にはたゞ一の葬むる能はざるものあるなり、即ち其感化力是也。誰かダニエル既に死せりと云ふや、彼の勢力は今尚偉大なり。誰かヨセフ既に死せりと云ふや、彼は今尚生きて言へり。誰かパウロ既に死せりと云ふや、彼の勢力の今日より大なるはなきなり。ジョン、バワードは如何、ヘンリー、マーチンは如何、ウイルバーフオースは如何、ジョンペンヤンは如何、ウエスレーは如何、ホウイットフイールドは如何。彼等は皆な空しく北邙一片の煙と化し了りたるか、否、否、彼等の反對者、彼等の迫害者の空しく枯骨となりて人の顧みるものなきに關らず、彼等は今尚多くの國民の中に生き、其光輝は赫灼として世を照せり。豈たゞ是而已ならむや、彼等は亦た他の世界にまでも輝きわたらむとするなり。賢き者は空の光の如く輝き、人をして正義に歸せしむる

ものは限りなく星の如くに輝かむとの言、是に於てか愈其眞なるを見るなり。冀はくは吾等をして此世と、其詐りと、其快樂と其野望とに對して死する者とならしめよ。冀くは吾等をしてたゞ神のために生き、人を救はむがために働く者とならしめよ。

最後に臨むで、請ふ、吾人をして博士チヤーマーの言を引用せしめよ。

「世の多くの人に就ては彼が呼吸し、運動し、生活し、此世の生涯を送りしと云ふことの外は何事も聞かれざるなり。何となれば彼等は世の善事に與からざればなり。一人も彼等によりて幸福にされし者なく、一人もなさゞりしなり。彼等は人のために何の善き業をもなさゞりしなり。斯くて彼等は失せぬ。而して世の人には昨日の蟲程にも記憶されざるなり。オー靈性の人よ、汝は斯の如く生き、斯の如く死せんことを欲するか。汝或事のために生きよ、即ち汝善をなせよ、而して汝の後に歳月の暴風が毀傷し能はざる德の碑を殘せ。汝の名をば親切

と、愛と、慈悲とをもて人々の心に記せ。汝決して忘るゝこと勿らむ、否汝の名、汝の行は汝の殘せる人々の心に於て天の星の如く明ならむ。」

ストップホルド、エ、ブルック

ストップホルド、エ、ブルックは英國宗教界の大家なり、前年ロベルトソン傳を著はし又た「現代の生活に於けるキリスト」なる說教集を公けにして夙に大に令名を博せしの人なり、其職を問へば即ち女皇陛下の侍講にして名聲實に朝野に藉々たりしなり、然るに氏が思想上の進步は氏をして終に正直なる心を以て英國々教の下に立つを得ざらしめたり、茲に於て乎斷然志を決して侍講の職を辭し英國々教の僧籍を去り、悉く富貴名譽を脫し、飄然孤介寂寞の身となりて傳道に從事するに至れり、此れ實に今より七八年の以前なり、氏の年齡當時恐らくは四十六七なりしなるべし、本編論する處の中年以後の立志の如き深く實踐自得する處、華辭空理を談ずるの類に非ざるなり、ブルック氏はまた文學の達人なり、近年英文學史の新著ありて廣く注意を喚起せり、而して宗

教家としての名望また漸く朝野の間に重からんとす

人生中年以後の立志

ストップフヲルド、ブルック

すでに之を導き出して其一人曰けるは逃遁て汝の生命を救へ、後を回顧るなかれ、低地の中に止まる勿れ、山に遁れよ、否らずんばなんぢ滅されん、(創世記、十九、十七)

余は今この物語を説明せんが爲め、又は道理づけんが爲めに、其如何程までは歴史にして、いか程までは歴史ならざるやを示すの必要を見ず、そは凡て時間の徒費たるに過ぎざればなり、但しこのうち唯一事のみ歴史の事實あり、他なし、シッディムの低地の市府が、火山生の地震によりて、世にも憐れなる最期を遂げたることとなり、此一事を除きては、直ちに此物語を以て、愛國的、宗教的の目途より作爲したる一記者の古話と見るを優れりとなす、

さて此物語を爾か見做つゝも、人生の經驗に富たる聖賢たちが、人を誡

め世を教へん爲めに、己が思想を物語に現形せる、他の宗教的古話と同じく、吾人は有益なる教訓を、この中より受け得るなり、されば此話中の人物を見ることゝ猶詩中の人物を見るが如くなるべし、而も史中の實事を見るが如くなるべからず、此話中の出來事をアキリース若くはアーソルの物語にある出來事の如く見は可なり、而して吾人をして古代の美術家が、其詩想中にあらはしたる人生の狀態が數千年の下、吾人につぐるに、如何なることを以てするかを見せしめよ、凡ての美術品に生氣活動するが如く、此話中の人物も、わが爲めには生氣活動して眞に迫れり、ロトとアブラハムとは人生の二大摸型を代表せり――今も吾人の間に存する摸型にして其出來事も精神に於ては今も尙起り得べきものなり、

これより先ロトとアブラハムの身上に、一事件こそ起りたれ、彼等が僕等の競爭これなり、而して其友誼を全ふせんか爲めに、兩人は合同の生

活を引裂きて個々べつ〳〵に住はざるを得ざるに到りたり、斯くてアブラハムは、其平生の鷹揚心もて、ロトに謂つて曰く、「何處なりとも汝が好む所を擇べ、われはたゞ汝が殘せるものを以て足れりとせん」と、而してロトは豐饒なる低地を擇び、アブラハムは山地と定めなき生涯とを擇みたり、尤も此は記者が(此物語の)爾か擇ばしめたるに外ならずと知るべし、斯くてアブラハムは只一人神と偕に逍遙し、その高尙き思想と其單純き生活をたのしみつゝ、死に到るまで其信仰の道を歩みたりしに、ロトは安逸と、快藥と、財寶とに目をくれ、罪と汚にて審判を忘れたる人の滿てる、市府に降り往けり、降り往きてのち、彼は此市府の腐敗を痛嘆したりと記さると雖ども、而も僅かに其腐敗に調子を合したる者の如し、そは兎も角も、アブラハムの品格はます〳〵偉大を加へしに、ロトの人物は次第〳〵に墮落したり、然らば人の品格は、此種の撰擇に由りて決するや知るべきなり、而して此大なる撰擇は、青年の時にあらずし

て、實に中年以後の時にあり、これ吾人が今日こゝに考究んと欲する處なり、

さて青年が初めて人生の首途に上らんとするに當り、其何れかを擇ざるべからざる二個の道あるべし、譬ば二人の天女、をの〳〵其性質を代表すの衣裳を着て、嬌然われらの前に立つが如し、其莊麗なる容姿に勇氣を和へ、其顏のおもてに經驗と實力とよりの愛嬌をもてる一人は、われらを山地の方にみちびき、一歩は一歩よりも難く、而かも其終は智慧と能力と、祝福なる處にいたらしめ、他の一人其顏には風と花との美を浮べ、其目には快樂のかゞやきを躍らせ、其足慾のために輕きものは、吾人をみちびきて歩の向ふところ花ならざるなく、日の光は愛の焰の如く暖き、よくも潤澤ひたる低地に至らしめむ、而も其終は奴隷と、虛弱と、疲勞と、矯すべからざるの惡智慧となり、而して吾人回顧る時は、既往低地みな荒れ廢たれて、花は散り、流は涸る、

かくてはと、吾人其禍より脫れんと欲せば、低地の極處、兀如として立つ、道なきの山を登らざるべからず、されど此時此山を登る、その苦楚いかばかりぞや、吾人夜の來らざるさきに、トラモ機石を飛び越へ、荊棘を踏み分け、氣を入れ、息をつぐの道に出で難からむ、尤も此は青年に於ける時のことなり、されど若しわれら最初より山地の方を撰びて低地の安逸を避け通し、而して今や山地の道を、其中途まで登りたりとするも、此上更に撰擇を要し、分別を要するが如きことあるまじきか、再と二人の天女は決して現はれまじきか、否な〳〵中年以後に於て必ず現るべし、ア、此時こそ實に最大の分別時、最大の立志時なれ、偶然とも見ゆる出來事、忽然としてわが行路にあらはるべし、其現はるや、人の身上、又は我身上に關す、――恰もアブラハムの僕とロトの僕の間に競爭の起りしが如く、則ち新分子のわが生涯に入り込むその瞬間に於て再びかの二天女は現はれ來るべし、されど彼等の形すでに變り、彼等の言葉すでに

變り、而して吾人も亦變れるところあるなり、吾人は今や多少の覺悟と智慧を得たり、生活の用具わが手に入りて、之を用ゆる如何を知れり、吾人は勢力を得たり、富に勢力を得たるのみならず、併せて吾人の弱點、われらの能はざること、吾人の能力の徒費を避くべきことをも知り得たり、吾人は身裝を整へたり、もし吾人の心情だに輕からば、山を登るにも行歩やすし、何をか天女の需むることをなす、なにとて彼等は道を遮ぎるぞや、アヽ間もなく吾人世と神との孰かを擇ばざるべからざるの時に逢ふべし、奴隷の生涯と館潔の生涯との孰かを擇はざる可からざるの時に逢ふべし、而して常に快樂をのみ事とする天女は、現然としてわれらの眼前に立ち出む――美麗かな、その手には富をもち、其頭には名譽の寶冠をいたゞき、其眼中には高慢の光を赫輝かせ、――さながら此世の(俗界)大女王、すべて何物にても思の儘に吾人に與ふるなり、たゞ心の安きと、愛と、神とは、之を能ふる能はず、彼女が下衣の裡には、もろ〳〵の

心配、もろ〳〵の祈願、もろ〳〵の貪慾、もろ〳〵の薄情は隱れあるなり、而して彼女の足もとには、もろ〳〵の蛇――卑劣、虛榮、詐僞、不正、陋習なぞの匍匐まはるなり、彼女叫んで曰く「われと偕に來れ、この荒野の石を黃金に變へよ、此山の眞中に一つの谷あり、汝は此處にて禮拜と、快樂と、安逸と、贅澤とを受け得べし、最早嶮しき山を登ることを止めよ、汝は既に十分の大志を遂げたるにあらずや、理想の絕頂は寒くして淋しゝ、富貴と、安逸と、我儘とに相結托せよ、――物質と實地とに執着せよ、見ゆる限りの花は、これわがものなり、而して低地の中は火をもて暖かなること、彼の山腹に暴風もて破らるゝ日光の如きにあらず、アヽ汝等山を登ればとて何の安きことか是れあらん、汝わが語に從がはゞ、浮世の必要品はすべて與へらるべし」と其聲朗々われらが耳に貫ぬき、一旦その語に從ふ時は、則ち是れ吾人を奴隷のくびきに繫ぎ去る、「是に於てロト目を擧げてヨルダンの低地を瞻望けるによく潤澤ひてエホバの園の如

くなりき、ロト乃ち此處を撰みて其天幕をソドムに向つて張れり」とあるは則ち此事なり、

されどもし吾人しばし止まりて、他の天女の語に耳を傾けなば、其益する所如何ばかりぞや、彼女ははでやかなる上衣を着ず、かゝやける冠を頂かず、その手の中には溢るゝの盃をもたず、其顏の表には、人もなげなる美をてらふことなし、彼女の衣裝は質素にして上より下に到るまで縫目なし、而して其褶に一つの隱れたるもの潛むことなし、そは其衣裝に褶なければなり、彼女は其頭に帽子を頂けり、されど其愛らしき顏を隱すに到らず、其顏には多くの悲ありしことを印すれども、平和のこれに打勝ることをも確に示せり、彼女の眼底には完全き喜びのあることを示し、其微笑は卑しからずして無限の望を表せり、而して彼女の手の中には愛の秘密を有つなり、彼女呼んで曰く「われと偕に來れ、而して偖も此山を登れ、吾人は暴風と艱苦に逢ふことあるべし、されど日の光自

然に輝きて、其喜びは優に高尙し、而して理想の絕頂は決して左る寒きものにあらず、又淋しきものにもあらず、そは神常にこゝに居まし、進んで息まざる者、正義を愛するもの、眞理を愛する者は此處に集ひをればなり、汝は富を得ること無かるべし、されど不思議を得ることあらん、汝は人の稱讃を得ることなかるべし、されど感歎と、希望と、恩愛とを確かに受ん、汝は浮世の智慧を得ざるべし、されど眞正なる事業を貫く赤子の智慧を受るを得べし、而して簡潔なること、目的の唯一なること、眞理に忠實なること、德を害ふ煩累なきこと等は、悉く汝のものたるべし、肉慾の快樂を與へ、はな〳〵しき顯名を與ふるは、我力の關する所にあらず、されど汝は價もて買ふことを得ざる、宇宙の萬樂を方寸に收むを得べし、われは汝に外面的の物を與へざるべしされど汝をして其內心的に價値あらしむべし、而して汝が死したる後も、汝の蒔きたる種子によりて此世界の多くの族に祝福あらしむべし」と

大ひなるかな天女の美や、われら彼女と供に山に登るに從ひ彼女の目ます〳〵愛らしく輝き彼女の顏の奥底に深き光のあるを認むるなり、もし卿等その眞心より彼女に從はんと思はゞ乃ち從ふべし、彼女の手は愛なるが故に、眞の生活の方針は其掌中にあり、されど一旦從つたる以上は憂ひ煩ひて後を顧みる勿れ、恐くは彼女の歡心を失はん、又決して其行路に横ふものに目を呉る勿れ、恐くは永遠に彼女より放擲られん、一旦志を立たる以上は、固く其決心を守れよ、此世を愛する勿れ、此世の物を愛するなかれ、而してアブラハム地を逐て轉居し、人なき野に於て山に於て家を設け、いたる處にエホバに祭壇を築きたるが如く、大丈夫にして簡潔なる生涯、而かも其中心には正義をもて祝福れたるが如くなるべし、

見よこれ中年以後の立志なり、而して青年の時よりも命に至る路は窄く、其門は小さし、其路を得るもの少なり」との語、一層的中するを卿等見

るべし、そはアブラハムの行跡を踏むもの百人あるときは、ロトの行跡をふむもの千人あればなり、而してそのトゞの結局は如何んぞや、後の日に及んで、ロトの身に如何なること起り、アブラハムに如何なることと起りしぞや、此世に從つて行みし者に如何なること起りしぞや、理想に從つて歩みし者に如何なること起りしぞや、

そも此物語は縱し安逸を貪り、心の死を顧ざる、凡の人の摸型を畫き能はずとするも、而もロトに於て一の摸型を畫き、其妻に於て他の摸型を畫き居れり、かれらは長の年月、安逸の中に住みたるに、霹靂一聲審判はその頭上に破裂し來れり、而して此の如き審判と驚愕は、今の世に於ても、財産の失墜、名譽の墮落、健康の毀損、人生の辛苦、艱難に由て多くの人の上に破裂するなり、唯アブラハムの如き簡潔と、純粹と、氣力と、敬虔とに充てる者に來る時は、勇氣凛然として之と戰ひ、之に打勝の喜望を發揮すと雖も、ロトの如き虛弱、衰頽したる者の上に來らば、滅亡此に的面

なり、飽まで驕奢の音樂に鈍りたるロトの耳へ「逃れて汝の生命を救へ、後を回顧るなかれ、山に逃れよ、否らずんばなんぢ滅されん」との叫、雷の如く轟き來るや、彼は其聲に從ふべきを信じたりと雖も、如何に憐に、力なげに、從ひたるぞや、凡て彼の心腸は弱り果てしなり、彼は其周圍の市民と一致して、其奸惡を共にせざるの力のみは有たりしも、斷然かれらを振りすてゝ起つの氣力を有たざりしなり、甘んじて惡人の仲間に住み、而もわが心を安易るに、われは決して此る罪惡にそまざるなりとの言を以てせしなり、日々かれの道德的、精神的の氣力を殺ぎ去る習俗の中に彷徨し、凡べて善事をなすに二心を以てし、一歩は一歩より正義に隔絶し、よは〳〵しく、女々しく必死の境に斷乎たる能はず、既に支ふべからざるの地位に倘眷戀し、審判の時到れるに、目を閉て見ざるまねし、手を執て無理やりに連れいたされしも、倘遲延ひて泣言を吐けり、何等の醜躰ぞ、何等の卑怯ぞ、夜のあけし時、かれ顧て過去のあれすたれたる

生涯を眺め、目を擧て寂寥しき身の終局を望みたり——其記憶は彼を驅つて無限の歎息に沈ましめ、其心の病と虛弱とは彼に伴つて墓の底にまでも到りたりき、請ふ目を擧て彼の身の果を見通せよ、吾人に敎訓を遺すことまゝ〳〵深きを覺ゆ、見よ彼れソアルに住むことをも恐れて、いとも淋しき山地に徙り來れり、而して言語に絶したる程の罪惡をこゝにて犯し終に其行衛の何處なるを知らず、彼は寂滅に歸せしなり

——是れ其分のみ、

余は此物語を、たゞ三千年前の古話として見ざらんと欲す、現に此は昨日も此市端に於て起りし事柄なり、されば今余が爾かく敎を說く此瞬間に於て吾人の中數人の者の心に、此事實際に起れるなきを保すべけんや、蓋は此物語の如き、目に見ゆる滅亡にあらずとするも、目に見ざる內心的の滅あるべければなり、惡より生ずるの生活を樂まんが爲に、其惡より身を離つ能はざるもの、其安慰を攪亂されんことを恐るが爲に、

罪惡を見逃すもの、不義と考ふる人物に對抗し能はざるが爲に、己が確信を傾くるもの、ソドムの門に坐りながら、尙天國の門に入らんとするもの、荊棘の冠を美花の冠に代へ、十字架を薔薇花の寢床に代へんと欲する者は到底審判の火を免れざるべし、縱し又身の安逸を得たるにせよ、彼は尙禍なるものなり、弱き、價なき、罪にくるしめる、不平勝なる不精神の人如何でよく福なるを得んや、彼の心中には何物をもあることなし、たゞ荒野と、寂寞と、死亡とのみ其友たるなり、

ア、卿等機會の後れざるさきに、審判の降らざるさきに、山に逃れよ、如何にもしてアブラハムの生涯を掴みとれ、これを取らんが爲に死するに柔弱と快樂の世界に於て、怠惰者の群に列し、財を貪る者の仲間に數へられて生きんよりは優れり、ロトも幾許の品格を有したるに相違なし、而も之を毀損れたるなり、されど彼と共に、彼の妻なる者あり、恰もこれ富貴安逸の爲に其品性を妨げらるゝ、偷安者の代表をなすなり、われ

試に想像をもて、彼女の狀態を畫かんに、之といふ惡をなさず、之といふ善をなさず、無爲無覺のうちに、其社會と其流俗とに浸染し、自ら進んで濁水に泳ぐことをせずと雖ども、知らず〳〵時流の中に卷き込まるなり、たゞ一點彼女が堅く執つて動かざるものは、其の身に得たる所の生活と、位置とに眷戀して、新らしき思想、新らしき行爲に徙らざるこれなり、

されば、にや、彼女は一旦その夫と供に出立しながら、尙も種々の絆にからまれて後を顧たり、古を棄るに吝に、新きをとるに吝に、彼女を取圍みし多くの財物を棄んことを惜つゝ、再彼女の友達に見へんことを希ひつゝ、彼女は俄の警告に逢て、全く狂顚したるなり、そは目に見ゆる此世の外、一として彼女に信仰なければなり、而して恐ろしき烟は彼女を卷き立て、彼女を鹽の柱となし、これを世の誡として遺したりき、

實に是れ目覺しき物語なり、而してキリストがロトの妻を見よと宣ひ

し如く、此物語の眞義を味ふときは、其目覺さ更に優るべし、それ人生危急の大機會に際會し、神のものいひ玉ふ期に及んで、遷延躊躇、過去の殘物を惜んで、之を身に着んとするは、時を知らざるの甚しきものなり、逃れて汝の命を救へ、山地の方へ逃れよと神呼び玉ひ、天使の手我肩に加りて我を押しいだすに、倚たらひて身を起さず、たゞたわいなく罪の舊慣にこれ從ふ、――而して審判は來り、硫黄の火は降り來るなり、

思ふに此二個の例證は以て世界の大問題を解するに足るべし、而して斯る大切の時期は、人の青年に於て來るものにあらず、何れも其中年以後に屬す、則ち人生中年以後の立志如何にあつて存するなり、吾人の力量も明らかに、吾人の品格もやゝ備りたる、其時期に於て、眞のクライシス(危急存亡の大時期)は來るなり、然らば卿等、此世の安逸に轉ぜんと欲するや、又アブラハムの如き簡潔なる生涯に轉ぜんと欲するや、何れの品格をもて身の品格となし、何れの終局をもて身の終局となさんと欲

するや、

請ふ彼のアブラハムの志を見ずや、其故國を出し以來、彼は決して動搖せざりしなり、彼の一生は善を以て一貫せり、日々彼は、其理想に向つて進歩したり、彼は神の築き玉へる盤石不動の都に望をおけり、毎日かれは、其力に於ても、其温良に於ても成長したり、彼の衷には神住ひ玉へり、彼の思想は雄偉に、彼の喜樂は圓滿に、かれの生涯は簡潔なりき、而して其方寸には宇内の驚歎を收め得たり、余が卿等に告ぐる處は、只の古話にあらず、アブラハムの生涯は即ち卿等自らの生涯にして、其品格は則ち卿等自らの品格たらしめんとするにあり、されど此品格、此生涯を我ものとせんには、卿等よろしく此世を脱却せざる可からず、

トロック

トロックは獨逸の神學者にして又當時第一流の説教家なりき、千七百九十九年三月三十日ブレスローに生れ、千八百二十五年、プロシア政府の公費を以て英蘭、和蘭の書籍館を巡回し、歸つて獨逸唯理派の中心、ハレー大學の神學教授となる、氏が畢生の目的は唯理説及び儀式派の外面的所執に反對して個人的實驗の基督教を擴張するにありき、而して氏が精細なる聖書註釋と、有力なる説教と、赫々たる德望とによりて、大ひに其目的を成就するを得たり、又氏は福音同盟會の一員として其名歐米各國の間に嘖々たり、千八百七十七年六月十日ハレーに於て死す、享年七十八、

無て叶ふましきものは一なり

トロック

イエス答へて曰けるは、マルタよ、マルタよ、汝多端により、思慮ひて心勞せり、されどなくて叶ふましきものは一なり、(路加傳、十、四一—四二)

罪の罪たることは、人をして、われ何故此世に來りしかとの探究を、如何にも輕視ぜしむる事實に由ていと明白なり、我志ば〳〵世人が左の言をなすに逢ふ、曰く、「晝の間はわれ働かざるを得ず」と、恰も人生の一切は、其働の何たるに論なく只働らきのみに存するが如くに、去りながら人能く心を眞面目にして其家業を勤むる時は、自然として家業其物は決してわが本來の大主眼にあらず、必ずや他に大目的のあつて存するなるを確認るに到らん、

とはいへ、罪は巧にも、學あり、智あり、又才藝美術あるものを虜にして、苦

もなく彼等を弄ぶぞ恐しゝ、そは美術學術等の者は大ひに心靈的の觀をそなへて之を慕ひ求むるは頗る高貴き職務の如くなればなり、高貴き職務には相違なし、併し神の榮光と恩愛もて其神髓たらしめざる以上は、かの文學、理學、美術界の働も、決して人を奴隷のくびきより放つ能はざるなり、之に反して如何に卑賤き職務にもあれ、その心ひたすら神を愛せんとの一徹より出づるときは、これ即ち心靈的職務の最なるものなり、ルーテル曰く、

信仰に由てなすときは、聖なる牧師、宣教の職と、俗なる下婢騙役の務と、其孰れか聖なりと云ふの區別あることなし

と、見よ、歴史が吾人に示す處の、凡ての誠實無妄なる人は、まづ其生涯に入るの首途に於て、わが注視べきの目的は、正に何物ぞとの大問題を掲げしに非ずや、斯る人に取つては、かの自ら旅人なりと云ひながら、たゞ途中の客舍にのみ躊躇して漫に大切なる時間を費し永遠の住處に急がざる者ほど驚くべきはなかるべし、ア、然りといへども、誠實無妄人の如何に稀有なることかな、其稀有なることは、造物者と其深意とを求めざるものこそ最怪奇なる者なるに、世は却つて神を求むる者を奇怪とするにて知らるべし、ア、是れ何等の顚倒ごとぞや、何等の忘れ深きことぞや、かくも神を忘れつゝ、世は如何に雜多のことに煩ひつゝあるよ、中にも學術と、算術と、美術藝道とのために、如何に熱心しつゝあることぞや、勿論學術もよし、美術もよし、誰一人之れを否む者なし、去りながら、人その靈魂の病を癒さゞるうちは、學術も、美術も、たま〳〵其苦悶を熾しむるのみにて、決してこれを鎭むる能はざるなり、歌に曰く、

價たかき　諸人の
眞珠の玉は　眞砂路の
めにつく濱の　岸巖の
ほとりにあらで

巖根の小さき　貝殻の
かくれし住所の　うちにこそあれ、

ァ、然り、我等が所有のすべてを投つても、ぜひ〳〵有つべき眞珠あり、なくて叶ふまじきものとは則ち是なり、それ神の子は此眞珠を其教會に遺し玉へり、故に教會の存らふ限り、此眞珠は求め得らるなり、われ靜けき流に沿へる綠の野邊の避所より、窓推開けて眺むるに、多くのものはイキセキと馳せ去り馳せ來り、かの大主眼に入るの門口を過越すなり、惜むべきかな、わが主イエスよ、汝は誠によくも云ひ玉へり、マルタのなせし如く、たゞ此世のパンのみの爲めに働く者は多端により煩慮ひて心勞す、されどマリアの如きこそ其善方を撰みたれと、回顧ば、われ天の糧に向つて慕ひ初めし以來、わが煩慮ひと心勞とは、實に鎮定りしのみならず、今はたえず安きと和樂とを有ちつゝあり、地に屬る福地に屬る智を求むる間は、決して苦悶を免る能はざりし也、神よ、人あり劍を稜

て汝に向はんとせば、汝笑ひ玉はん、而してこれを決して容し玉はざるべし、たゞ赤子心もて求むる者には、汝顯はれ玉ふ、汝の顯現は日の光線よりも優り、誠に温に且和に、われらを照し玉ふなり、かるが故に汝を求むるにも、亦穩と靜とをもてするを望み玉ふ――固より誠實一徹に、而も性急、過激を戒め玉ふ、ヲゝ主よ、マリアが汝の足下に坐りし時は、汝も亦彼婦の傍に坐り玉へり、これ汝を求むる者には、いつも此くすべしとの、汝の敎示とぞ知らる、汝は唯マリアの如くして汝の足下に我等を見んことを望み玉ふ、われ汝を確認しのちは、われ生來の目途を一變したり、「汝を愛す」といふ、たゞ此一點より、わが生涯の途を門出せり、われ此世のさま〳〵の物を中心として運行し間は、一つの安きをだに得ざりしに、汝を中心として運行を初めし以來、初めて眞の安きを覺へたり、固にマルタの如く、此世のパンの爲に働くことも當然のことなり、アゝイエスよ、汝も大工の仕事場にて、かの謙りたる勞働をなし玉へり、之に由り

て凡の職業は神聖にして、決して卑むべきものならざるを示し玉へり、されど無くて叶ふまじきもの、即ち其中心に一點の光明あらんことを最も要め玉ふマルタが其働をなすは可なり、唯マリアの心を最も要するのみ、聖き主よ、汝がヨセフの大工場に於てなし玉へる勞働は、他日汝が聖殿に於てなし玉へる禮拜と同じく、神の喜びて受け玉ひし處なるをわれ信ず、それ天父の深意をなすは汝が糧なりき、されば我にも其糧たるぞ忝なし、われ野に出でゝ耕す時も、市に出でゝ商買するときも、たえず我糧たるは天父の意なり、

ヲヽ主よ、汝は恩惠に富み玉へり、汝だにわが衷に居し玉はゞ、わが能力は如何に滿圓に發揚すべきよな、汝の愛の感化の下には、萬事繁昌せざるはなし、玩味せよ、神を敬ふことは凡ての事に益ありとの言を、此世の美術學術も、汝が惠光に照されなば、其色は如何に輝き、其香は如何に郁はしきよな、アヽ爾り、なくて叶ふまじきものは一なり、

我等に己が日を數ふることを教へたまへ

一たび死ぬることゝ、死て審判を受ることゝは、人に定れることなり、

（希伯書、一〇、二七）

世の多數の人を見よ、かれらは其心の衷に死といふことは未嘗て夢想だにせざる者の如く生活ふにあらずや、是併し過てり、事實は眼前、生命は露間の生命にして、朝風さそふ時來れば、是非なく散りゆくものなりと、最歴然く示すにあらずや、死は紅顏を蒼白しむゝとは、實に嚴重しき眞理なり、去りながら此眞理をしも、人の我意に委するときは、凡て他の此種嚴重しき眞理と共に、だゝ何事もなく放擲らるなり、もし之を賊によく受け容るゝ者には、身を支ふるの息杖となるも、これを疎濶にする者には蛇となるべし、曰く死果して紅顏を蒼白しむるか、善哉、さらば來れ、我等をしてあらん限り、此世の快樂を受けしめよ、萬の若やかなる者を手折らしめよ、われらをして薔薇の蕾を其萎まざるに冠らしめよ」と、ア

、是れ何んといふことぞや、それ一死萬事終るや、否や或はこれ夢をたに夢みざる睡眠なるや、若くはこれ暫しの假寢が永遠の覺醒に出逢ふの短橋にはあらざるや、兎にも角にも、我等一たびは其暗處に入るべきものたるは拒むべくもあらざるなり、只その暗處に於て、永遠審判を示す、牖戸に目を注むる者は、紫の光輝これより發射るを認めむ、われ之を見るに、かの牖戸は常に開けるものゝ如し、されど世の多數の人は皆見向きもなさですぎ行くなり、むかし靜肅なる手をもてベルシヤザが居室の壁に、汝は秤にかけて秤られたり、而して不足を發見されたり」と書き示せしを、彼見向きもなさで宴遊し如く、世は恬然としてたゝ飲食に忙はし、トハ雖ども、これ只外貌のことのみなるを我深く信ず、凡そ人として淺かれ、深かれ、其心の奥底に永遠審判を恐るの感念あらざる者なし、われ又確と認む、尋ね見よ誰一人とまて一死萬事終ると信ずる者ありや、今手近き證據をあけんに如何に浮躁たる人と雖ども、其人只ひと

り殘されなば、彼淋しきを感じて恐るべし、そも此恐懼は何處より來るぞ、これ此世に於てすらも、其靜肅寂寥のときには、己が負債(心的)を責るの大主權者あるを感ぜしむるの事實ならずや、此他說明の道あることなし、又人をして幾たびか志を立てゝ又挫け、挫けて而も亦立ち、以てその既往の罪過を償ひ、以て其新道途にのぼらんと希望せしむるもの、蓋し、其源頭遠く此處に發出せずんばあらず、それ此希望は其人の能力の強き程強し、然はあれども、

人三十にして初めて己が愚なるやを疑ひ、四十にして漸く之を確知てその空謀を改め、五十にして己が怠慢を嚴責て、其明知を實施せんとす、而して已に晩し、

ア、永遠の審判てふ如き、嚴肅なる思想は、人の表面に浮ぶものにあらず、其心の奥底に沈めるなり、かるがゆへに至智の智をもて洞察ときは、かの恬然關せざるものゝ爽にも、確に此思想存するなり、見よペリクス

の容貌を一見して誰か其貪慾充ちたる胸の裡に、審判を恐るの恐ありと知らんや、而かも實にこれ在りしなり、若し是あらざりしならば何故

パウロ公義と撙節と來らんとする審判とを論せしかば、ペリクス懼れて答けるは、汝さばらく退け、われ便時を得ば、また汝を召さん」と、云ふが如きことあらんや、實に然り、人苟も一たび、此命が與ふる凡の善物を、悉く棄て去らざる可からざるの域に達せば、恐れざらんと欲すも得べからざるなり、實に然り、人苟くも來るべき生命の救を確めざる限りは、現在の生命をも樂む能はざるなり、アヽ實に然り、人苟も神と和ぎをなさゝる限りは、決して其眞福を味ふ能はざるなり、見よ、嬉を我に與ふる此世は、刻々時々我を遠のき去るにあらずや、柱時計の錘の一搖毎に、砂時計の砂の一粒毎に、其聲高くひゝきて「此世の快樂は消ゆくなり」と、警刻するにあらずや、ヲヽ我魂よ、來るべき生命の救を確めずんば、現在の世の生命をも、よく樂み能はざること果して眞なりや、果して眞なれば、汝が

最期の際に自ら顧みて、わが一生は潔よかりしと言ひ得る樣、即今よりこれを努力よ、何よりも優りて「凡て我を信するものは永遠生くべし」と宣へるものを確く信ぜよ、

イエス常に人なき處に退きて祈たまひき、

（路加傳、五、十六）

「天より降り天にをる人の子の外に天に昇りし者なし」と宣ひたるキリストすらも、まば〳〵この受造物を背後に殘して、全心こめて天父に祈玉ひたれば、況てや吾人に取て、祈の必要なること果して幾許ぞや、時運の進歩と共に、人生はいやましに煩忙、混雜に入り來れり、然るに世人はいや少なに、閑靜、沈思の時を得つゝあり、キリストの徒さへも、知らず此氣運の奴となつて、天上よりの威光を豐に受くる能はざるなり、それ太陽は、靜にして平なる水の鏡面にのみ、其顏光を反射ぞかし、人は皆たゞすぎゆく現今にのみ生活して、過去も未來も考ふるに暇あらざるが如し、而して其歸着は、現在の今さへ正しく生活し能はざるなり、神よ、われ人なき處に退きて、汝と共に費せし其時間は、我に取て如何ばかり神聖なりしぞや、恰も沐浴より出たる如く、われを清快しものは其時間なり、

われ日毎家職を勤むる間は、人生の千萬の震動、わが耳の邊にどゝろき亘りて、瀑の鳴響くにさも似たり、されば、我ながら本我を悟る能はず、況んや神の我に告たまふ語ゐや、アゝ如何に其狀を變へて、凡ての物の見ゆることかや、如何に其容貌を異へて、我の本我に見ゆることかや、晝間の煩雜の去りしのち、聖けき靜夜の來りし時、其時にはわが衷よりも、亦外よりも、嘗て言べくもあらざる邊より、言歷々と語り出づ、語り出づる其語は、きく人にとりては甚た痛し、されば人大概は、この靜肅沈思の時間を厭ふて逃げかくる、アゝ人々よ、併し汝の耳を此語に閉づるなかれ、この語の中には、いと悲げにも汝を天父の家に呼ひかへすの聲ぞきこゆれ、而も汝は斯る遙けき異國にさまよひつゝ、かの愛しき天父の家を忘却んとするか、請ふ汝よろしく本我に返れ、沈思の時、祈禱の時を求めて、其本我に返れ、本我に返りて覩るときは、此世の朦朧の消ゆると共に、彼岸の榮光は現はるゝなり、

汝は其本我に返りて、汝の外一人だに伴ふ者なき、其信實の狀を恐るゝかや、ア、我はよく知る、更にこれよりも汝の恐るゝものあることを、他なし、絶ず汝が厭棄するにも拘はらず、絶へず汝に伴ふ所の汝が本心是れなり、而して記憶せよ、これ實に神の聲なることを、神は見ることを得ざる時にも、其聲きこえて儼乎たり、此汝に伴ふ聲を懼れつゝ、如何でよく神と和ぐことを得んや、もし汝が眼前に、神ながら現れ玉ひて、其眼光汝が眼孔を射透すときは、其時汝如何にせんとするや、われ世の多數の人を見るに、壁土は其壁より落ち、棟梁は其屋根より落んとする家の内に、たゞ〳〵仕事に執着して、毫も他を顧ざる愚人の如し、友あり、爲に其危急を警戒して、まづ其本我に返れよと言へば、彼即ち曰く、「我に時間なし」と、而してかの警戒者を笑つて曰く、「愚なるかな」と、ア、知るや、知らずや、汝こそ愚の最なる者なれ、汝は生命よりも其仕事を重んぜり、これ何んと云ふ事ぞや、汝が天の友「神」聲を放ちて汝を招き、共に〳〵靜處に退

きて、汝かために其運命の大歸着を示さんと宣へるに、汝これを拒むとは何んたる事ぞや、此くも汝は强情なりと雖ども、其心底深き所には、何んとなく苦痛あるを覺ゆなるべし、而も之を醫癒せざるは、果してこれ汝の益たるや、益たること絶へてあるまじ、可憫なる盲人よ、此世のさわがしき響につれて、今は思はず過行きつれど、其トドの結局は如何ぞや、必ずや一たびは靜けき處に入つて、ケ程まで汝がきかざらんと欲したる警戒を是非ともきかざるを得ざるべし、而して其期に及んできく時は、審判者の聲となることそ是非なけれ、もし此生にありし間に聞しならば、信友の聲なりしものを、

ア、我魂よ、汝如何なれば貴重き時を、かくも卑しき喜樂のために徒費すことぞや、汝はこゝかしこと人間の家をはせ訪問つて、汝の神その裏に待ち玉ふを顧もせず、これ何んといふ事ぞや、尤も此る時に汝其裏に返へらば、神必す汝を責め玉はむ、併し其責め玉ふや、只人をして、我と我

手に耻まどひて其涙を拭はしむるのみ、彼は寛にして靜なり、而して我を責むると共に、我魂に告ぐるに、天の家と、其こゝに備へある萬福とを以てし玉ふなり、「見よ、我戸の外に立て叩く、もし我聲をきゝて開く者あらば、われ其人の所に就ん、而して我は其人とともに其人は我と偕に食せん」と、

ア、神と共にある人の榮光は美はしきかな、すでに神と一和ぎたる心もて、此世に向ふ時は、凡てのもの和にみたざるはなし、惡き者にも其手を廣げ、敵の頭にも愛の焔を點するを得ん、すべての職務は喜樂の中に成就し、すべての苦害は天父の手にて除かるべし、かくて神はモハヤ月の上、星の彼方の神にあらずして、居まさゞるなき神なるを確知、其威權は、天と地の萬物を藏ひ、其權能は一切衆生に及ぶを畏こき、

チヤンニング、

「余は天地間に、自由思想家の一人、眞理の戀愛者、基督の弟子として自ら持せんと欲す、而かも一宗派に屬することを願はざるなり、余は狹隘なる一教會の墻壁を脱して、青天白日の下に立ち、眼界廣大自ら見、自ら聞き、眞理の導く處は其道如何に嶮しくも亦寂しくも、斷乎として而かも温順に從はんと欲す」とは是れチヤンニング氏が自ら其赤心を告白したる語なり、實に氏は千七百八十年四月七日米國ロードアイランド州ニウポルトに生る、年十四にしてハウアード大學に入り、四ヶ年にして業を卒へ、その後宗教上につきて大ひに疑を起すと共に、又大ひに深思熟察する處あり。其初めて教を說き出せしは千八百二年の秋なりとす、時に年二十二、而して其名聲天下に噴々たるに到りしは三十四歳の頃なりき、彼ユニテリアン派の開祖なりと雖ども、基督の救を信し、基督の

先在(降誕の前既に天に存すこと)を信じ、基督の人性以上を信したるなり、其人物の非凡なる啻に宗教家としのみならず、國家の公民として無双の俊傑なりき、死する時、年六十三、實に千八百四十二年十月二日、日曜の日なり、

基督教は道理に合ふ宗教なり、

チャンニング

われは音福を耻とせず、(羅馬書、一、一六、)此はこれ保羅の語なり、而して何人と雖ども、苟もキリスト教の性質と、其感化力とを了解したる者は、則ちこれに同意することを躊躇せざるべし、そも〳〵余がキリストの福音を耻とせざる所以のものは、これが道理に合ふ宗教たるを以てなり、キリスト教は理性に合致するなり、かるが故に余は之を信ずるの價値ありとなすなり、かるが故に余はキリストの徒と自ら伍し、又これを辨證、擴張することを赤面とせざるなり、本論の目的は即ちキリスト教の此要求を説明するにありとす、余は神道の光と、人の理性の光との間に、現然たる調和のある事を卿等に示さんと欲す、もし之を示さんとするに當つて、余が所論他のキリスト信徒と相衝突するが如きことあるも、余は決して彼等に道德上、又は智力上

の欠點を歸するの心なきなり、余は人を批判するに其心術、其品格、其實行を以てす、其考案、又は其所說の異なるを以てすることなし、而して余が敬虔と道德とを尊重するの念は、毫も敵と味方によつて、へだてなきなり、

キリスト敎は道理に合ふ宗敎なり、若し否らずんば、余は之れを信奉することを恥ちざるべからず、然るにキリスト信者中には、道理を擯斥して、天啓を其反對に据んとするもの往々これあり、斯ることは、縱善人の眞實キリスト敎を辨護せんとするより出るにもせよ、到底過たるを免れざるものなれば、余は赤心より之を謝絕せんと欲す、そは實に我宗敎を不信者の手に降參せしむるものなれはなり、これが爲めに、わか城廓の土臺を崩し、これが爲に我宗敎を人の天性に反するものとなし、敵をして人の天性を辨護すとの信用を得せしむべけれはなり、神の吾人に與へ玉へる最大恩惠は、此理性にあることを、決して忘る可からず、其名

の何たるに論なく、もし此理性を墮落せしむるが如き宗敎なりせば、其神より出でさることと知るべきのみ、そは神は理性の本源にして、理性の發達は、人物の目的なればなり、天啓は此理性を完全に進むるの方法にして、自然と、攝理と、神の靈とに相合ふものなり、余がキリスト敎を棄てする所以のものは、理性を擴め、理性を强め、且理性を高むることを以てなり、もし余にして理性を棄てざる限りクリツチヤンたる能はずとせは、余は其擇む所を躊躇せざるべし、余はキリスト敎の爲に、わが財產も、わが名譽も、わが生命までも犧牲となさんと欲するものなり、されど何んたる宗敎に對しても、此理性を犧牲となすこと能はず、そは余をして人間たらしむる所以のもの、獸類と異ならしむる所以のものは、此理性なればなり、それ神より得たる此能力を、無するは、實に不信心の大なるものにして、全く吾人の衷にある神を害ふに外ならず、キリスト敎は理性に弓を引くことなし、却つて之を一致し、之と助とし、之を友とするものな

り、

余はこれより以上述べたる思考を明め、確めんが爲に、之を二個の段落に分て論ずべし、第一キリスト教は理性の權威に立つ者なれば、自ら破壞せざる限り、之に反對する能はず、との點是なり、此段に於ける余が目的は、道理を輕蔑するに由て、天啓を助けんと欲する人々の誤謬を矯すにあるべし、第二はキリトス教と理性の光とを比較して、其相一致する所以を示し、尙細條に入りて、キリスト教は著しく理性に合ふ宗教たるを證明せんとするにあり、此段における余が目的は、福音を不信者の嘲より辨證し、且信者の信仰を確立せしむるにあるべし、さて本論に入るに先ち、預め、卿等に告げざる可からざることは、問題の性質より往々解し難き事柄も起るべければ、十分の注意と思想とを加へられんことなり、又こゝに理性といふ語の意義を定め置くこと大切なりと信ず、そは眞理の研究に必要なる第一歩は、語の意義を決定するにあれはなり、はげしき爭論は語の曖昧よりしば〳〵起りたりき、然らは理性とは如何なることを意味するや、請ふ之を說ん、

そも〳〵理性てふ語は、實にいろ〳〵なる意味に用ひられたれば、之が精確なる區界を定めんことは容易の業にあらず、然りと雖ども、常に此語に附帶ふの一思想あり、人心の能力中、最も高尙なるものは此理性なりとの點是なり、さて哲學上の難解をかつぎ來ることを止めて、余は只理性に屬する二個の特質を指示さんとす、第一宇宙的の眞理を了解するは此理性の特職となす所なり、世に局部的の眞理と宇宙的の眞理あり、宇宙的の眞理は最尊きものにして、之を悟るの能力は、人間の他物と異なる所以なり、而して是れ實に理性の特職に屬す、余をして此意義を說明さんが爲に、二三の實例を引證せしめよ、例へは余か某處に立ちて石の地に落るを見るとあらは、これ局部的の眞理なり、されどこれに止まらず、更に進んで此一個の石のみならず、凡そあらゆる物躰は皆相引

くものなりとの理法に達すれば、是れ宇宙的の眞理なり、則ち一切萬物を貫くの原理にして、萬物の實在する所以たるなり、それ此眞理は理性の能力に屬す、又例へは人類の働によりて物品の成就するを見ば、是れ局部的の眞理なり、之より進んで凡そ物あれは原因あり、原因なくして物あることなしとの原理に達せば、是れ宇宙的眞理なり、而して此眞理は理性の能力に屬す、―― 又目を擧くるときは空間あるを見る、されど是一部分のみ、吾人の五官の及ばざる所に無限の空間存在して、何れに到るも空間あらざるなきを識認すれば、是れ宇宙的眞理なり、又一人に對して善事をなすは善き事なりと知るは局部の眞理なり。されど之を擴めて何處何如なる人にも、善をなすは當然にして、惡をなすは罪なるを感覺すれば、これ宇宙的眞理なり、以上の例證によりて、余が云はんと欲する理性第一の特職は明かになれりと信す、則ち宇宙的の眞理不朽の原理を發見するにあるなり、

さて其第二の特職は、第一と甚だ相似たるものにて吾人の心中に起る、種々の思想を集めて、之を一致統合せんとするの勢力是れなり、理性の奥底に横はる確信は、眞理は凡て一致すべし、其一致せざるは則ち誤謬あるの證據なりといふが如し、之れが最大の希望は、相反すと見ゆる眞理を快然相合致せしむるにあり、新奇の事物に接するや、理性は如何にもして之を既存の知識中に統一せんと欲し、一物と雖ども、心中に孤立せしむることを容さず、散在せる眞理を總合して、之を一系統の中に入れんとするなり、其目的とする所と喜樂とする所は調和にあり、其絶ず進行せんとする所は、あらゆる萬物を統括して、これを無限の完一に結了せしめんとするにあるなり、此の如く觀來れは、理性は人心の作用中、最榮光あるものにして、神と宇宙との一致を此一心に寫し來るものなり、かく理性の意義を説明して、尚一言加ふべきことは、人往々理性の名を以て、其憶想若くは利己、高慢、其他の卑しき偏頗心より保持する論説

を飾らんとすることあり、是れ深く戒むべきなり、余がこゝに天啓は理性と適應せざるべからすといふものは、此る汚れたる能力を指すにあらずして、眞理を會得し、道德を修養する爲めに用ひらるゝ大能力をさして云ふなり、さて是よりいよ〳〵本論に入りて、二個の原理を論究すべし、

第一余が明かにせんと欲する所は、天啓は理性の上に立つものなれば、理性自ら破壞せざる限り、決して之に反對する能はざるの點なり、試に其理由を云はんに、第一吾人をして天啓を受くるに堪へしむるものは理性なり、理性なくんば基督の福音も吾人に益はなし、そは天啓は理性の上に立つものなればなり、卿等余が言の眞なるを知らんと欲せば、まづ何ものに天啓の與へられしやを注意せよ、そも天啓は何故畜類に與へられずして、人間には與へられしぞ、神の使は、何故野に行きて其福音を鳥と獸とに宣ざりしぞや、此は言ふまてもなし、此等の動物は理性を

有せず、而して之を有せざるが故に、彼等は天啓を受くるに堪へざればなり、啻に畜類に天啓の無用なるのみならず、理性の未だ發達せざる赤子に於けるも亦同じ、理性は天啓の準備にして且土臺なり、此理を尙一層明かにせんと欲せば、啻に天啓が何者に與へられしやの點のみならず、如何なる方法に由て與へられしやを注意すべし、天啓は如何にして與へられしぞや、言語に由てなり、天啓あつて言語ありしや、否な、言語は既に其以前にありき、然らば問ふ、此等言語の意義は、天啓あつて初めて起りしや、否な、もしイエスの敎を聞くもの、其以前より語の意義を解するにあらずんば、何を以て其敎を悟ることを得んや、それ此等の言語と其意義とは皆理性の生出したる所なり、然らは天啓をして其効力有らしむるものは理性なりといふ、亦宜ならずや、人は聖書を讀み能ひし前に、其周圍の天地を讀み能ひしを記憶せざる可からず、人は其朋友の心事を察し、其音聲を解す、人は又自ら省みて、其心魂の性質を知り得るな

り、此くて人間の第一修業所は、自然と理性とにありて、天よりの福音も亦此準備なくして効を收むる能はざるを知るべし、心は生れながらにして本元眞理を有り、天啓は空なる心中に降りしにあらず、勢力、智慧、愛、道德、美麗、幸福等の語は、皆人心の性質を表はすものにて、基督敎は此等を承認し、此等を材料とし、此等を其通辨者として立つものなり、もし右の所說につきて證例を擧げよとならば、余はまづ義務の觀念を示指せんとす、吾人は此觀念を聖書より初めて得しや、天啓を受けたる者も受けざる者も、正邪の區別は了解するにあらずや、天啓ありしより以前に、人を其品行によりて、或は褒め或は責ることをなせしにあらずや、野蠻時代に於て、本心の聲は聞れざりしや、而して社會の進歩と共に、其聲は一層明了となるにあらずや、基督敎は義務の念を創造せず、却つて之れを基礎として立り、其他の觀念に於けるも亦同じ、天啓は單獨にして立つものにあらず、又無爲無想の心に示顯せられたるものにあらざるな

り、此は自然攝理、本心、理性と相待つべきものとして與へられたり、而して此等の能力は、皆一つ神より出でたるものなれば、決して相矛盾することを能はず、神は唯一つの聲を有ち玉へり、調子外れの聲を發するものは人間なり、唯整然たる調和は、造物者より來る、されば神より出し宗敎なりと云ひながら、神の人性に賦し玉へる眞理と反戻するが如きは、是れ決して眞正の宗敎といふべからず、見るべし、吾人をして天啓を受くるに堪へしむるものは、此理性なることを、而して實に理性は天啓を成立せしむるの材料を備ふるものなり、以上を余が第一の考察とす、第二に余が言はんと欲する所は、天啓も理性の判決を待つて、初めて其權威を有するに到るとの點なり、これ甚た大切なる考察なりとす、例へは新約書を手に採るに當つて、如何なる根據ありて、此書が神の眞理を現すことを信じ得るや、其紙面の文字を見る時は、他の書に印されたる所と異なることなし、天より不思議なる聲ありて、此は神の道なりと確むる

ことを聞かず、又秘奥なる聲のわが精神に起りて、キリストの奇跡を信せよと命ることあるを知らず、然らは如何にして聖書の疑問を決するることを得るや、余は他の眞理を驗すると同じく、之をわが理性に訴へざるを得ず、余は天啓を判定するが爲に、特別の能力を與へられたるを覺へず、一つは神の道を研究するため、他は其受造物を研究する爲とて、二個の理解力を吾人は具へ居らず、恰も同じ肉眼を以て、或は天を見、或は地を見るが如く、同し理性を以て、或は天啓を究め、或は自然を究むることをなすなり、理性こそ基督教の證據を集め、又其價値を秤るものなれ、余は特にキリスト教をもて、人の心に記されたる道義法と比較せんことを欲す、何の宗教たるを問はず、此道義法を無するものならば、余は之れを排棄するに吝ならざるべし、例へは社會を惡み、且之れを害せよと命するが如き宗教あらば、其證據を究むるまでもなく、余は斷じて之を拒絶すべきなり、故に吾人が理性の領分は、啻にキリスト教の眞理を

判決するに止まらずして、其判決を下すの定規をも生出するなり、天啓は其眞僞を判するの定規を自ら提出すること能はず、そは天啓なりとも、これが眞理なるを證明せらるゝまでは、左る權威なければなり、それ神よりの福音を判定するものは理性なり、而して其理性中最も大切なるは道義力なり、然らば、天啓は理性の上に立つものにして、之に反するは自ら破壞ふ所以なるを知るに足るべし、

第三に余が言はんとする所は天啓の天啓たるを理解するものは理性なり、もしこれ無くんば、天啓も其用をなす能はずとの點なり、如何にして聖書の眞義を了解することを得るや、余は理性を以てすと答へむ、新約書の意義が、理性の働きを經ずして、直ちに其紙面より心中に徙ると云が如きことはあらざるべし、或は此書の文躰非常に明白にして其語も易く、其文章も短く、其意味も一目瞭然たるものなれば、敢へて智力を勞するの要なしと云ふものあらんか、是れ過てり、聖書にはさる不思議

的の單純あることなし、大抵一つの語には一つ以上の意味あり、而して記者の用ひたる意味を知らんと欲せば、こゝに理性の判決を仰がざるべからず、多くの書物中、其正解を得るに、理性を要するもの、聖書より甚しきはなし、これ此書の不完全なるにあらず、其文躰の雄健にして譬喩的なると、年代を去ることの遠きを以てなり、聖書を繙かば、左の一句あるを見む、曰く「もし右の手なんぢを罪に陷さば之を斬て棄よ」と、われらは此一句を其文字通りに解すべきか、爾かせは、余は自ら此肉躰を害はざるべからず、是自殺なり、又曰く汝等先祖の量を滿せ」と、之を文字通りに解せばキリストは世に罪を犯せよと勸むるものなり、されば新約書の眞義を得んと欲するものは、深く此理性を活用して、眼光紙背に徹するの明なくんばあらず、もし吾人にして理性を棄て聖書に到らんか、聖書はもろ〳〵の不理、不德を以て蔽はるに到るべし、理性は基督教の記錄を了解するに必須なるものなり、天啓は理性の權威に立つものなり、」

さて以上論じたる證據によりて、天啓は理性を土臺として立つものなりとの點は、略明らかになれりと信ず、而して余がこゝに之れを論ずるは、啻に教理を支へんが爲のみならず、卿等に一層理性の尊重すべきを教へんが爲なり、世に神學者なるものあり、往々理性を輕侮すと雖ども、神の恩賜中、理性より大ひなるものはなし、理性は吾人の裏にある神の影なり、之を放擲せんとするは、是れ自らの天性を破りて獸類に墮落せんとするものなり、もし人あり、病の爲に理解力を失ふものあらは、ひとゝ憫んで之を癲狂院に入るゝにあらずや、而して宗教家の理性を無する者は、實に其害、癲狂者より甚しきものあるなり、

勿論理性を輕蔑する宗教家とても、其心情は善良なるなり、其目的も天啓を尊くせんとするにあるなり、されど眞理は實なき大言によつて益する所なし、而して基督教を害ふものは、理性を信せざるの懷疑說より大なるはなし、余はキリスト教に力を與へ、若くは人氣を引んが爲に、自

然をして啞たらしむるの必要を感せず、キリスト教は新らしき證據を自然界との調和より得來るなり、余は天よりの光が、凡ての受造物に照り亘るを信じ、且之を喜ぶものなり、異邦人もクリッチャンに較ふれば薄暗きながらも、矢張其光を有つなり、而して其光の出づる源や吾人と同じ之れを譬へば同じ大陽にして曉方の光と日中の光と相異なるが如し、自然界の教訓をして輕侮に陷らしむる勿れ、これ天啓の語と同じく神より來れはなり、自然の神聖なるは實に天啓の神聖なるが如し、此兩のものは何れも無限なる唯一神の發現なり、其間には調和存す、もし此調和存せずんば、キリスト教の位置は支ふべきにあらざるなり、

さて以上説明したる所によりて、余が第一の主意は論定したりと信ず、則ち基督教の天啓は、理性の上に立つものなり、故に自ら破壞せざる限り、理性に反對する能はずとの點なり、而して之に次で余が論定せんと欲する所は、啻に理性に反對せざるのみならず、全く善くこれに合致す、

基督教は理性に合ふ宗教なりとの點にして、卿等の注意を請んと欲する所なり、此論點は容易に敷延することを得べし、余は順次キリスト教の主意を掲出して、其理性に適合ふ所以を示さんと欲す、卿等の記憶する如く、余は本論に入るに前ち、理性の特職として二個の作用を示したり、則ち宇宙的の眞理を了解すること、異種類の思想を一致統合すること是なり、偏通と、統一とは、理性の重もなる作用なり、吾人はキリスト教に於て是等を見出し得るか、若し見出し得ば、キリスト教の合理的宗教たる所以は、定まるものと謂つべし、故に余は此等の試器をキリスト教に適用んと欲す、而して先づ統一の點よりして初むべし、

凡そ宗教にして合理的たらんと欲せば、其自ら主張する眞理と眞理とが、互ひに相一致し、且自然界、若くは人心界の眞理と合致せざるべからず、今キリスト教には、此一致あるを余は確む、而して研究を加ふれば加ふる程、ます〳〵明らかに此記印を見るなり、まづ福音書に入つて、其種

々なる部分を比較するに、余は全き和合をこゝに見る、而して基督教は科學の如く組織的に教へられざりしを顧ば、ます〳〵此和合の價値あるを感ずべし、イエスは其誡と訓とを、機に觸れ、時に應じて語り出で玉へり、然るに之を集むる時は、實に美はしき完一を形すなり、これ既に不信者と雖ども疑はざる所、又贅言を要せざるべし、今唯、此調和に關する一例のみを擧げんに、基督教の教理訓誡は、凡て一個の大目的に注瀉すと、則ち人間の道德を其最上點にまで達せしめんとするにあるなり、之を疑ふものあらば、基督教理中にて此目的に關せざるものを指摘せよ、啻に之のみならず、キリストの人物と其教訓との間に、著しき調和あるなり、イエスの教へ玉ひしことは、すべて其身に形を成せり、其開祖と其宗教との間には、全き一致あるなり、見よ如何に嚴にして美はしき一致は、彼の十字架上に現はれをるぞや、唇もて罪人に神恩を教へ玉ふイエスは親ら一身を擲つて世の最も墮落したる者を救ひ、これを天の父に

導き玉へり、其浮世を脫却くべきを說き玉ふや、親ら極貧に甘んじて、多くの者を眞に富さんとし玉へり、其靈魂不死を說き玉ふや、親ら死せる者を生して、其證をなし玉へり、實に基督教は、何れの點より見るも、整然たる一致を有つものなり、一精神を以て貫き一目的を以て貫くものなり、其教義、命令、及び實例は、悉く一徹の調和を保つなり、

されど是のみにては十分ならず、凡そ合理的の宗教は、啻に自ら相一致するのみならず、他の眞理、則ち自然界、若くは心靈界の眞理と合致せざるべからず、然らば余はキリスト教を取つて、自然界と並べ置くべし、此二者果して一致するか、余曰く全く一致すと、余が近代科學の光を以て自然界を見るに當り、ます〳〵明らかに覺るものは、獨一神の居ます證跡なり、余が自然界に究め入る程、ます〳〵深く見來るものは、自然界の完一なり、一つの智慧と能力と、善良より出たるの點なり、かの異邦人は多くの神々を祭ると雖ども、其中一つの大ひなる神あるを認め居れり、

キリスト教に到つては、全世界に唯一神教を宣へ傳へんとす、是れ自然に合へるなり、又自然界は神の善德は普偏無私なるを示す、造物者は、其仁愛を一小區域に限り玉はず、大陽は卑しき百性の小屋よりも、尊き帝王の御殿に多くの光を照すことなし、雲は彼の人の畑よりも、此人の畑に多く雨を降すことなし、富めるものにも、貧しきものにも、正しきものにも、正しからざるものにも、皆な一樣に惠を垂る、神の善德普遍なりとは自然界の示すところなり、而してキリスト教には如何に此の眞理の赫耀たる事ぞや、——且又自然界を見渡すに、一として孤立するものなし、いと微なる草木も、いと親密なる關係を空氣と、雲と、日光とに有つなり、調和は自然の大法なり、而して基督教には如何に此眞理の赫耀たる事ぞや、そは基督教の希圖は、全世界の人類を一つに集めて、之れを調和と一致と、平和との中に入れ、恰かも自然界の萬物相一致するが如とくならしめんとするにあればなり、夫れ自然界の一大法則は、生命と、支給

と智慧と、安全とを、他物の仲保と、働勞と、苦辛とに由て受けしむるにあり、時としては全社會の者が智く、清く決心よき人物の努力と献身とによりて、其壓制と、零落とより救はるることあり、基督教の眞理は、如何にとく此自然の法度に適ふことぞや、見よ吾人の天父は、罪と死の樣より吾人を救はんが爲に其獨子を遣し玉へり、彼が吾人をして永遠の命に到らしめんとの刻苦盡碎は、此世界に著大なる救を與へたり——故に曰く、天啓は自然界に合致する者なりと、今一歩を轉して之を內界に向け、之を人の靈魂に對照するに、余は此處にも大ひなる調和存するあるを見るなり、試みに心靈の作用を見よ、肉躰に優ると幾許ぞや、靈は限りなく發達せんとするに、肉は絶へす地に朽果てんとするに非ずや、キリスト教の示す所は實に此實際に一致するなり、キリスト教は如何に心靈の眞價を發揮する事ぞや、如何にイエスは靈の贖に比べて肉と、肉の慾との賤しむべきを示し玉へるぞや、此他に大ひなる眞理、わが裏に存す

るものあり、即ち人の幸、不幸は、其心の狀態に屬す、心靈の清潔を力ずして、身の安全を計らんとするは到底無益の業なりとの感これなり、而してキリスト教は此大眞理に合致するのみならず、寧ろ之を土臺として立つなり、曰く、天國は吾人の衷にありと、而して其大目的として心靈を惡より救ひ、之れに力と威光とを與ふる事をなすなり、――尙一つわが衷を省て發見する眞理は、心靈の全德は、此現世のみにて發揮し盡さず、希望の大法は常に未來に向つて銳進するとの點なり、靈魂は現世のみの爲めに造られずとの點なり、而してキリスト教は如何によく此心靈の示指する所に合ふぞや、これが大教義は永遠の生命にあり、此生命、現世にありては萠芽のみといふにあらずや、――余もし時を有せば、心靈の大法、智力的、道德的、社會的の作用を一々論して之が基督の教と合致する所以を示さんと欲す、されど今は之を卿等の私考に一任して尙一つ心靈の事に就きて云ふ所あるべし、余自ら省るに、罪の汚れと其罰を

恐るの恐れとあり、而して如何に善くキリスト教の斯る心に適合することかよ、悔改者の罪は赦さるべしとて、血をもて保證したるは基督教なり――余故に曰く、キリスト教は外界の自然にも、內界の自然にも皆一致すと、余は以上の論明に由て、キリスト教に統一和合の性質ありて、理性の第一要求を滿足する所以を述へたりと信ず、故にこれより第二の要求、則ち宇宙的の性質に及ぶべし、夫れ理性の一大特職は、宇宙偏通の眞理を發見するにあり、而してキリスト教は、實に此要求に應するものなることを吾人は信ず、キリスト教の一大特色は、偏通普及なるにあり、試に其教義、訓誡及ひ其精神を視察せよ、余は凡て此等に於て、宇宙的の性質あるを認るなり、狹小、姑息、地方的のものを見ることなし、福音は決して一時代、若くは一國民に限るの形跡を存せず、キリスト教は直ちに失せ去る一個人、若くは一社會の利益に關せざるなり、されど人性に貫く精神的、不滅的、無限的の大法に訴ふるなり、之が目的は、心をして限

りなき實在と、限りなき正善とに向はしむるにあり、之が形式たるや、他の宗教の如く、細目、枝葉までも既定せられざるなり、されど一以て萬を統るの義務の大法を發揮して、其千變萬化の活用は、之を個人に一任するなり、キリスト教は神を宇宙の父として現すなり、從つて博愛の大法赫然として明らかに、人を人として愛し、神の子として愛し、兄弟として愛するなり、かの千八百年以前、其周圍は狹隘愚蒙の氣をもて充てるの眞中に立ちて、十九世紀の曉に到つて、漸く人の悟り來れる、大眞理を說破したるはキリスト教なり、余はキリスト教を究むれば究むる程、其宇宙的の性質あるに驚くなり、余は此宗教に於て、凡ての宗教を統べ、すべての時代に通じ、すべての人種、人物に適應するの宗教を認むるなり、キリスト教は亞細亞人種に限らず、歐羅巴人種に限らず、凡ての人に應し、凡ての人に解るの言を語るなり、凡ての時代、凡ての國土に於て、人の榮光、又幸福なる所の道德を行へよと命ずるなり、而して萬人の有する、苦

惱と、恐懼と、本心の責とに向つては、安慰と、希望とを與ふるなり、實にキリスト教は世を經るます〳〵久ふして、其功德の及ぶ處いよ〳〵廣く、且偏きなり、キリスト教の理性に合ふものたる、昭々乎として明からなりと謂つべし、キリスト教は合理的の宗教なり、これを研究すればする程、これを實行すればする程、ます〳〵其然る所以を確知るに足らむ、卿等は此宗教を信するが爲に、決して人性最高の能力を束縛せられ、又は墮落せらるゝならんの憂ひを抱く勿れ、決して其憂ひなければなり、よろしく、滿腔の精神を注ひて此道理に合ふ宗教を篤信せよ、

ロボルトソン

氏は千八百十六年二月三日英國、倫敦に於て生る、幼時佛國に往て、同國のトールスにて古代文學及び佛語を學び、後ち幾許もなくして再本國に歸り、エヂンボロー大學に入りて全く業を卒ふ、時に年十八、初め氏の目的は軍人たらんとするにありき、然るに其の父と牧師との勸めにより、强ひてチックスフヲルド大學に入らしめられ、此に神學を研究することゝはなれり、然り而して氏か眞實なる精神は、當時の神學に對して大ひなる不滿を起さしめ、終に殆んど懷疑論に陷るに到れり、此に於て氏は獨逸に入りて神學の根底より研究せんと欲し、志を決して同國に遊ぶ、而して得る處ありて歸る、故に氏の信仰は最濶大にして且堅固なり、氏か接手禮を受けしは千八百四十年七月十二日の事にて實に二十四歲の時なりとす、レインチエストル、チヤルランハム、ブライトンにあ

りて敎を傳ふこと十三年、終に千八百五十三年八月五日ブライトンに於て死す、享年三十七、其說敎集最世に行はる、本編キリストの孤立は其中の著名なる一なり、

處女崇拜

ロボルトソン

基督教の初代に於ては、處女マリヤの心と生涯との清なるを殊に尊敬せしが、此尊敬は次第に化して遂に一個の崇拜とはなりぬ、基督教美術の變遷は妙に此崇拜の進化を示す者の如し、古代の畫圖を見るに初は獨りマリヤを畫けるあるのみ、稍後には基督とマリヤとを共に畫く、尙ほ下ては基督御位にあり、母は冠を着けて其下に坐す、末世に至るに及んでは母子同等の位置に立つ、遂に母は御位に登り基督は其下に坐するの畫あり、最後に羅馬教の繪畫を見れば、甚しきかな基督は怒つて將に世を滅ぼさんとし母は中保となりて其子の怒より世を救はんとするのさまを示すなり、處女崇拜の進化は實に斯の如く初は基督の爲めにマリヤを尊びたれど後には彼に勝りて此を尊敬崇拜するに至りたり。

吾人は固より迷信の世に行はれ得る所以は其内に幾何の眞理存するが爲なるを信ずる者なり、眞理は迷妄の衣を着せらるゝとも尙能く人の心中に忍入る力あり、故に此迷信を除く第一着歩は其内にある眞理の何物たるを指摘して人の思を專ら此眞理に注がしむるにあり、若然らずんば迷信の根幹枝葉を切倒して殘なく之を絶滅したりと考ふる時もまた萠芽し雜草の如く繁茂して之を除かん事頗困難なるへし。

宗教改革の後三百有餘年にして再び英國に處女崇拜の事興起する所以は何ぞ、他國に比ぶれは英國は最羅馬教の復興し難き事情あるにあらずや、曾て羅馬教が人を苦めたる事は未だ英人の忘るゝ能はざる處なるにあらずや、然るを今日の哲人と云はれ君子と云はるゝ人々にして尙ほ處女崇拜を其心に缺く可らざるものゝ如く感ずるはそも何の故ぞや、余は答て曰はん、處女崇拜の教は眞理に根ざす處あるが故なりと、新教徒の演說雷の如くなるも、說教壇の辯論何程濃なるも、改革家の

勞働如何に巧なるも、處女崇拜の迷妄と其中にある眞理とを分離せしめざる間は決して此迷信を絶滅する能はざるなり、基督以前に許多の論者ありて偶像教を除かんと試みたれど悉く失敗したりしを見よ、哲學者之が僞を論じ、諷刺者之が妄を笑ひ、殆ど之を塵にしたる事幾回なるを知らず、然れども偶像教は依然として人の心に生存したりき、是れ偶像に代りて人心の要求を滿足せしむるものを與へざりしが故なり、今使徒保羅が偶像教に對する處置を見よ彼曾てアテンスに於て、知らざる神にとて捧たる祭壇を見出したる時妄に偶像教を排擊するが如き拙策を須ひざりき、只迷信の奥に隱くるゝ眞理を拔出し之を揚言して迷妄を其儘に棄て置きぬ眞理は成長し、迷妄はいつか地に落ち知らぬ間に萎み果て、限なき亡滅に歸し去りぬ、吾人は保羅に倣ふて處女崇拜を處置するの頗る可なるを認むる者なり。

今處女崇拜の根據を尋求むるに基督以前に於て人々が最も尊敬したる諸德は勇氣智慧正義の如き重に男子に屬する性質なりき、然るに基督は之に反して順從慈愛清潔の美德たるを宣傳したり、而て基督の思想に養はるゝ教徒は漸次勇氣智慧に勝りて温和清潔を慕ふ心を生じ、此心は次第に發達して遂に是等の婦德を尊敬崇拜せんとするに至りたり、去れども如何に美なれば人は決して無形の德を崇拜する者に非ず、崇拜に必要なるは實在の人なり、德と人とを併せ之を崇拜せんとす、形なき德を化身せしめ肉あり血ある人となし其前に跪き崇拜の念を注ぎ出さんとするは人情の至誠止を得ざるに出づるものなり、而して若し人を得ざれば則ち想像の人を設けて崇拜の本尊となさんとするなり、基督教徒は柔和清潔を慕ふの極遂に柔和なる人清潔なる人を得て之を崇拜せんと欲するに至りたり、然れども天下何れの處にか處女の如く柔和なるものある、處女の如く清潔なるものある、而して彼等聖書を繙けば處女マリヤあり、乃ち彼等が心に溢るゝ柔和清潔の思

を此婦人に被らせあらゆる婦德を是れに裝はせ、是を絶世の美人理想の淑女となし聖母たるの稜威を是に添へ其前に跪に至りたり、思ふて茲に至れは誰か處女崇拜の起因を深く咎むる者あらんや、羅馬教は冷淡無味の教義を以て滿足せず、其身に淑德を具へ能く人の悲憂を思遣る活ける婦人を掲げて信仰の本尊となさしめたり、歴史的に考ふれば基督の與へたる新思想が遂に偶像教となりて世に顯はれたるは又避く可らざるの勢なりとす、羅馬教がマリヤ崇拜を以て基督の榮光を被ひ隱したるは固より誤謬の大なるものなれど吾人は決して其中に潜む眞理あるを忘る可らず、斯くも濃なる人の至情に基きて發達したる處女崇拜を破壞するは決して辨論攻擊の能くする處に非ず、之を廢滅し得んものは獨完全なる人格を具ふる基督あるのみ、マリヤに換へ與ふるに基督を以てするにあり、

基督の心は男女兩性を兼有す、抑完全なる人格は男性女性の兩極より

なるものなり、基督の人格は一方に偏せず善く此兩性の調和平均を保ちたり、基督の衷には婦人の情ありて然かも亦た男子の智あり、丈夫の丈夫たる處、婦女の婦女たる處其衷に具らずと云ふ事なし、乞ふ其生涯を見よ、荒野の誘惑に打勝し心は鐵石の如くありしに非ずや、人民の怒號に對して毫も動せざりし心は天の靜なるを示たる者に非ずや、彼は曾て一度も柔和の感情の爲に正義の念を曲ぐる事なかりき、憤然としてペテロを叱したる如き、儼然としてエルサレムの亡滅を宣告したる如き事實を考ふれば人格の一極たる男性は殘なく基督の衷に具備したる事明らけし、今轉じて他の一極を求めよ、人の憐むべきを思ふて基督は時に涙を垂たり、基督の如き能力を具へたる人の涙は其美實玉に勝るなり、基督は深く人を思遣り、又人に思遣らるゝを希たり橄欖山上に血汗を滴らして祈りし時彼の魂は孤獨を感じて殆んど消失せんとしたり、彼れ喪家の悲を見ては其身を振動し、飢たる人に逢へば之れが

爲に食物を供たり、弟子傳道より歸れはしばし人なき處に往て休めよと云ふ、兄たる人の心よりも寧ろ妹たる人の心の顯れたるものと云ふを得べし、凡そ斯の如く基督の胸中には婦人の婦人たる心最濃に流動したり、吾人若し基督の人格の何たるを學び審に其一隅のみにあらず其全局を會得するあらば決して處女崇拜の危險の陷る事なかるべし處女崇拜敎が與へんと試むる眞理を吾人は既に基督の中に得、又何ぞ處女を崇拜するを須ゐん、處女崇拜敎の目的とする處は其實基督にあるべき筈なり、彼等は處女崇拜の祭壇に於て知らず〳〵基督を崇拜しつゝあるなり、彼等が知らざる神は基督なり、言ふ勿れ、余等が崇拜する處は基督にあらずしてマリヤに在りと、マリヤに具はる婦人の性格は悉く基督の中に具はり居るなり、

曾て萬軍の主の名を取て人に發顯したる神は智慧剛勇正義の神なりき、されども尙ほ柔和慈愛清潔忍耐の如き神の性格ありて存する事は

基督出るに及んで初て明なるに至りたり、婦人の心を有てる基督の品性は慕はしきかな、基督の榮光は男性と共に完全なる女性を兼たるにあり、晝夜吾人が心の奥裏に炎の如くに燃え上る限なき欽慕の念は基督に結付くに至て初めて滿足するを得可きものなり、基督を措て地上何人かよく吾人の天の望に應ずる者あらんや、如何に美なるも、如何に聖なるも吾人の朽ざる愛念を滿足せしむる處女あらんや、青年あらんや、語を寄す、江湖の青年男女よ、基督のうちに眞正の淑女居るを尋ね知れ、悟を茲に啓きたる者は以て百萬の誘惑に勝ち得て餘あるべし、人は云ふ清潔は虛名なりと、然れども基督を心に得たる者には清潔は實在たるなり、よし彼は惑ふ事あらん、過る事あらん、去れども其胸裏には燼えやらぬ光ありて行く可き道を輝かし、彼をして限なき亡滅に沈淪せしむる事なかるべし、

基督の孤立

イエス彼等に答けるは今なんぢら信ずる乎時將に至らん今至りぬ汝等散て各人其の屬する處に往唯だ我を一人のこさん然れども我獨り居るに非らず父我と偕に在すなり（ヨハネ十六〇三十一三

十二）

孤立に二種あり地位上の孤立及ひ心靈上の孤立是れなり、一は人、吾人を見す、吾人に觸れず、吾人に聞かざる時、彼れ吾人を呼びて孤立すと云ふ、然れども之れ只地位を隔つるのみにして實に所謂孤立に非らざるなり、何となれば斯の如き場合と雖も他人の同情は寂しき吾人の心を慰めて餘りあればなり、中宵漁夫獨り海上に在るも陸地の苫屋の中に彼れの安全を希ふ者あり、其祈禱の天に達しつゝあることを記憶する時は彼れは孤立する者に非らず、孤客遠隔の地に旅行するも彼れ歸鄉する時、歡迎する者の面影彼れの心中に輝くあらば彼れは孤立する者

に非らず、學者獨り學窓に勵むあるも多くの人心は彼れが講說せんとして備へつゝある眞理に同情を表することを思ふ時は彼れは孤立するものにあらざるなり。

心靈上の孤立に至りては實に是れ孤立なり、他人の手は我手を握るあらん、然れども之れ只我心に氷の如き彼の冷情寒思を送り來ることあり、他の視線は我視線と合す、去れども之れ我心底まで讀む能はざる凝視なるを如何せん言葉は我唇を離る去れども暗憺たる洞窟を通して來る反響の如く實意を得ずして歸ることあるを如何せん、假令我れは肩摩轂擊の衆人中に在るも基督の言ひ玉ひし如く「我に觸るものあり」と云ふを得ず何となれば彼等の觸るゝは只形骸上のみ心靈的にあらざればなり。

然り而して心靈上の孤立を感ずるものに二種の人あり、是れ即ち彼此此感を抱く所以のものを異にせるに依る、獨立躬行毫も他より奬勵を

要せず同情を求めず、獨り斷じ自ら行ひ義務の存ずる處毅然として之に當り少しも屈撓するなく、總て之を横斷して進む者之れ一種の人物なり夫れ自らを敬ふものは人の尊ぶ所となるは當然の理なり、故に斯の如き者は感情に重きを置かざる業を成就するに頗る必要なる人物なり以て剛腸の將帥たるを得へく、以て勇氣ある外科醫たるを得べく又以て不人望を恐れずして自らの希圖を斷行する政治家たることを得べし、然りと雖も只自己の勇氣を以て孤行する者は頗る弱し故に彼れにして自らの弱點を感念し來る時は其悲悽の情頗ぶる大なるものとす。

ヤコブ父の家を離れて、パダンアラムに向ふの夜其途次に於て眠る此時彼れ初て孤客の身となれり、新社會前に横はり、衷には總ての古き聯想絶へたりき、エリヤ宮中より棄られて獨り野に在り、曰く惡人は神の祭壇を壞ち劍を以て豫言者を殺し而して尚余をも捨て且余が生命を

も取らんと欲すと叫へり、以上二人は共に孤立の人なりき、然れども柔剛其性を異にすれば從て其感念を異にせりヤコブが慕ひ求めし者は同情なりき而して此熱望は單純なる夢によりて成就し即ち地より天に懸けられたる梯子により神と人と交通し得ることを彼は知るに至れり、エリヤに至りては暴風、地震、火焔等の激變ありし後遂に靜に小さき聲あり告げて云ふ汝は孤立するものにあらずと、此種の人に對して弱はしとの感情は悲痛の破裂と共に來り、孤立せるとの愁思は石腸を斷たしむ而して悲雨慘風に遇ひ遂に彼等は自ら孤立せるにあらず、天父共に在り玉ふことを學ぶことを得るなり。

濃情にして頗る孤立の境域を恐れ、同情の中に生存せんとする人、此れ他の一種の人物なり、此の如き依賴心は決して卑怯より來るにあらず智力の弱きより出づるにあらず、只愛情の强きに依り、胸裏のヒユマニチーの焔々たるものあればなり、故に助力或は握手是れ彼等の欲する

處にあらず、只同情此れ實に彼等の慕ふ處なり、去れば試誘の彼等に來るや、激烈なる攻擊の樣を以て來らずして自ら斷行すべきものと信ずる義務に對して世人が甚だ冷眼薄情を以て見る時、或は彼等が公言すべきものと信ずる眞理の甚だ少數の人のみに依りて認めらるゝ場合等に於て全く孤立する感想を懷ける時、誘惑生ず而して冒頭に記せし聖語の精神を悟らんと欲せば斯くの如き人々の心を研究せざるべからず。

他人の同情を要する濃厚優柔なる愛情を賦與せられたる基督の靈は他人に同情を與ふるのみならず、又他より之を得んことを欲せしなり。見よ、優しきヨハネを友とし撰び、婦人と交際して慰めを得、無き所より仕ふる婦人に侍かれゲッセマネの園に於て試練の時には何人か傍に在らざれば祈禱する能はざりしものは實にキリストなり、基督に於ては決して頑固なる自己心とてはあらざりしなり、今之を證せんに彼れ

曰く我れ獨り在るに非らず父我れと共に在りと此の語の如きは世の峻嚴なる者の言ふ能はざる處にして、彼等は決して慰めを要する孤獨の感を懷くことを欲せず然るに基督は我は孤立せりと云ひ、而して直に之を正して否、孤立するにあらず、父我れと共に在りと云へり是れ彼れの心裡に力行難を排して進む如き凄孤の念あることを示すものと云ふべし。

基督の生涯中最も吾人の感情を惹起し且特に彼れの精神を形造くるが如く見ゆる者は彼れが孤獨せしこと之れなり、故に彼れを最も能く了解せしと云ふ者未だ半ばより多く彼れを了解する能はざりしなり、最も能く彼れを知れりと云ふ者實は未だ彼れを知らざりしなり、弟子達思へらく我等今彼れを了解し且信ずと、然るに孤獨の人答へけるは、汝等今信ずるか、時至らん而して爾等四方に散じて各己が處に行き我を獨り遺さんと、實に彼れが世に孤獨せしは彼の生涯を貫く最も悲哀

の事實なりとす、依りて今茲に左の二ヶ條に付考究せん

第一　基督の孤獨

第二　基督の孤立せし時の精神

一、基督の孤獨は崇高なる彼れの神性に原く彼れの心の絶對的に高貴なることは、他人の同情より彼れを離れしむ、而して一方に於て彼の濃緻なる性情は他より同情を受くることを得さるを、最も悲痛に感するなり。

世に第二流の英雄あり、吾人は暫く彼を了解することを得且吾人若し此種の英雄と基督とを比較し來れば、前者は人間の摸型にして、後者は神性ある者の摸型なり兩者の別、自ら判然たりとす、洗禮の約翰の生涯を見よ、彼れが粗豪なる善人にして超俗の士なりしは世人の容易に認むるところにしてパリサイ及びサドカイの黨は受洗せん爲めに彼れに來り衆民は豫言者として彼れを拜尊せり、故に彼れにして若し柔弱

なる國王及び姦惡なる婦女と衝突する事件なからしめば、吾人は約翰が欣喜を以て其生涯の行路を終へ、或は俗望に背かさる如く認められざりし理由を見出す能はず、而して今何故に世人は約翰を納れて基督を捨てしかを問はゝ只一の答あり、前者は極めて單純にして簡明なる性質を備へ後者は神聖にして深遠なる性質を備へしこと之なり。

生物界に於て單一なる構造簡易なる機關が、腦髓心臟肺臟の用をなす、最下等の動物を試驗するには少しの困難をも感せざるべし、然るに學生にして人間の生理を研究せんと欲する時は是れ實に彼れの終生の勉強を要す、又一國の憲法を理解せんとするには頗る容易なる事業なり、されとも宇宙の法則を研究せんと試むる時は、忽ち極りなき矛盾を發見せん、即ち一の法則は他則と相反し、此の運動は彼の運動に抗し、幸福あれば禍災あり、斯の如き紛亂混雜中にありて能く神の定め玉へる順理と單一とを鑑定し得る識力は只人類中の少數者に與へらる、而し

て無限の基督の靈性と人間の靈との差は人間の構造と貝屬の成立、宇宙と一國とを比較するが如し。

故に輕薄なる觀察者には基督の生涯は齟齬、衝突の塊の如く見へ總て不條理の如く見ゆるものあらん則ちパリサイの徒は神聖なる敎師にして能く稅吏及び罪人と共に食し得る所以のものを悟る能はざりき、彼れの兄弟すら彼れが期定せし公職と彼れが企畫せし退隱と微行とを調和する能はずして言へり、汝若し此等のことをなし能ふならば何故に汝自らを世に顯はさるやと或者は彼れを以て善人とし、或者は彼は民を欺く者とす以上の如き理由に依りてカペナウム其の他の場處に於て彼れの傳道の發途に顯はれし總ての好意は漸く冷却し去り初めにパリサイ宗、次にサドカイ徒、後ちヘロデの政派遂には衆民相繼で反目して立つに至れり、而して衆民の不平程恐るべきはなし何となれば社會上層者の怨恨は其力微弱なり、去れども社會の下層より動搖し

來る獸類的の叫ひは道理の聲に聲なること恰も暴風に依りて激濤狂瀾と變したる大洋の如し樫樹の心を有する者と雖、其前に倒れん、見よ使徒等が屢々其心を挫き或者は知らずと云ひ、或者は叛き或者は棄て、遂に皆散されて各其欲する處に歸り、而して眞理彼自身のみ獨りピラトの裁判所に遺さるゝに至りしにあらずや、

今吾人の學ぶことを要するものは、寂寞荒涼の感を懷くは人生通常のことなれば、同情を與ふる人なく、誤解の士多き時は、吾人が歎に沈むは至情のみ、何處に於ても又多くの家族中に於て斯くの如き士女あるは吾人の常に知る處なり、彼等にして基督の孤獨の感と自らの悲想とを對比せば大に慰めらるゝ處あらん、然りと雖も彼等が先づ自らに問ひ明かに定めさるべからざるものは、世人が斯く彼等と分離する所以のものは、基督の場合に於けるか如く、彼等の品性の崇高なるに依るや否やにあり、汝は云ふ我は孤立し人我を顧ずして去り、世我に反目し能く

我れと交るものなしと、然り之れ則ち汝が俗世に超絶し、或は彼等の了解し得ざる高貴なる事業を企圖實行せんとし、或は不義を嚴正して自らの主義を告白し、之と成敗を共にするに依り俗徒小民神聖にして純潔なる汝の行爲を惡み高貴にして傑出する汝の志望を嫌ふに依るか、然らば汝の孤立は之れ基督の孤立なり、若し然らずして汝、慾に充たされ、他人の福運を計るには、冷淡不情不注意にして爲めに世人の汝を顧みざることを驚嘆するが如きあれば、汝は決して我は孤立せりとの基督の語を用ゆるを得ず、否此語は汝と何んの關係をも有せざるなり。

今左に吾人をして基督の自ら孤立せりとの感を懷きし一二の場合を考究せしめよ。

彼れ十二歲の時に當り獨りエルサレムの宮殿に止まり父母彼れを索めて會す時に彼れは學者の間に坐して問答を試み居れり、ア、此時高遠なる思想—人生の大問題たる責任と自己の運命等の大疑問は此少

年の心に群起し來りしなり。

眞誠なる生涯を送る者は無極の蒼空の吾人の壓の上に廣がるを見る時は、漸く從來の義務の境域大ならず、慈親の家庭の屋根、已に其卑くきを感ぜざらんや、古き信仰の箇條已に狹隘なりと感ず、吾人終に之を捨てゝ生命ある實事を以て之に更めざるを得んや、而して斯の如き思想を喚發するは地上の父の權威は天父の命令に附從すべきものなることを知了し來りし時期にありとす(斯の如き時期或人には頗る早く來ることあり)

青年の心に初めて神を感じ、此地は嚴肅なる場所、然り天國の門戸なることを知る時は彼れは孤立獨行の感を起す、梯子の天に懸るを夢み、而して醒たる後も、其夢は莊嚴なる事實として常に彼の心に往來するを覺ゆ吾人は青年男女が或は頻に質問の精神を發揮し、或は佇視凝目事物を觀察し、或は切言急語疑問の解釋を求め、或は熱心諸事を渉獵し、

或は大宇宙の宮殿中に在る天然なる教師學者に向ひ眞理を尋究するあらば、吾人は知る彼等の心には前述の如き時期の近きつゝあることを、斯の如き時代に在る者は頗る執拗頑固なりと雖も、知らずや果實の最も酸き時は青色より、將に成熟に移らんとする際に在るを、吾人にして須臾の間俟つあらしめんか青々として酸き菓實の代りに甘汁滴らんとするものを得ん、群疑百出の時は誠に悲慘にして荒涼寂寞人事悉く不定、人生は實在なるものに關はらず宗教及び社會の實在は虛空なるが如し、往日、用ひ來りし錨の綱は切れ去つて心靈は數々只見へざる手の教導のにみ依り、神の宏大無極の計畫の裡に飄々として流れ流されんとす、茲に於て乎、汝等何故に我を求むるや我は父の務をなすべきを知らざる乎との孤立の情を顯はす語を發するに至る。

第二基督は試誘を受け玉ふ時に孤立の感を懷き玉ひきロルダンの荒原ピラトの法庭グッセマヂの園に於て彼は孤立したりき、否基督のみ

ならん、吾人は皆只獨り其試練を經ざるべからず、否各特性を與へられたる吾人の心靈は斯の如き試練を必要とするなり、夫れ吾人は各全く新しき靈を以て此世に生れ出でたり、此れ未だ試練を經ざるものにして前途無極の負抱あるものなれば、誰ありて吾人の將來の人と爲り、吾人の將來の責任を豫言することを得るものなし、吾人は其性質上各特別の規則を有し、獨心獨行自己の計畫を實施し何人にも肘を制せられず、自己の秘密を以て之を成功せざるべからず、誘惑に於けるも亦斯の如し、我が誘惑は決して他人の測り知るべからざる內外千萬特種のものを以て來る、故に吾人は只獨心以て之に當らざるべからず、獨り荒原に行き、獨り痛苦の中に、十字架に耐へ、獨り人情反覆の間に當らざるべからず、故に明日の勝利を期して、現在の寸間に絕苦ある胸宇は只自己のみ知了すること、往々あらん、然れども吾人が最も恐懼の感想を懷くは神聖なる我に對して姦惡なるものゝ反する時にあらずして、吾人の心

中に、德義と、德義と衝突する時なり、此れ實に斷腸血涙潸々たるの時なりとす、夫れ劣情を以て來る試練は全力を以て之に當り、以て之を拒絶するを得べし、然れども天父に孝ならん爲に、慈親に不孝なるを要し、嚴密に義務を果さん爲めには、或は込入りたる約束に違はざるべからず或は勁進直行せん爲めには他人の難澁を顧るべからず、或は慈愛なる友の勸言もサタン後に退けと大喝せざるべからざる時、則ち總て人間の言、說の無功なる機、是れ心靈が實に孤立を激感する時なり。

第三救主死せんとするや其靈は實に孤立の感を懷きしなり、時來り弟子は總て散じて彼れは獨り遺さる、是れ嘗て彼れの預言せし處なりとす、夫れ死の吾人に臨まんとするや、人事總て吾人を去り、眼漸く眩み傍人の容顏益認むる能ず、耳漸く衰へ來りて、人聲達せず、ア、此れ實に「我獨り死せん」とする時、否此れ人獨り生くるの時、哲學者吾人に告て曰く、天地創造の時、原子は他の原子に密接せず只兩者の或る距離まで接近

するや吸聚力止み、測知すべからざる或る力、兩者を反撥す、而して外見上兩者密接するが如く見ゆ、人の靈に於けるも、或る一二の事情に於ての外、決して他の靈と親交するにあらず、皆只外形上の關係を有するのみ、斯の如き事實を思ふ時は吾人をして實に戰慄孤獨の悲感を抱くの止む能はざらしむ、然れども之れ實に人生中の最も眞面目なる有樣の一なるを如何せん、而して死は偶人生は斯の如きものなりしを證明するなり實に終生我は我が衷情の最も深き處に於て常に孤獨せるなり。

第二、孤立せし時の精神

一「我孤立せり然も我れ孤立せるに非らず」と之れ實に偉大絶美なる語に非らずや、然るに吾人「悲みの人」と語る時、微弱と悲痛の感情を以てするは何ぞや、之れ吾人が十字架、悲痛孤獨の事情を見、之れを我が柔かなる感情に訴へ、以て我が愛憐の思を惹起せんとするに依るなり、ア、我は我の愛憐に依りて彼れの孤獨を汚さんとす、愛憐、彼れに對して愛憐

とは何事ぞ、我は誠心に於てなし得るならば何ぞ天父の外誰れも共に在らざる偉大なる孤立を尊敬崇拜せざる、焉んぞ愛憐すと云ふを得ん、我は寧ろ彼の孤獨心より剛毅丈夫の摸範を得べし只優柔なる同情は彼れに對して殆んど其用をなさざるなり。

一個人の氣力の如何を試みるは自然に獨行せざるを得ざる事情に迫られたる時にあり、他人と協同して事を成すの日は決して其力を見る能はざるなり、乞ふ汝單獨にしてなし能ふ處のものを我れに示せ、汝の聽衆已に知り、悟り、汝の論斷總て同意を以て享けられんとす、此時汝其信ずる處のものを主張す、之れ眞理を辯護すと云ふ、假令汝孤立し白眼疑心汝を圍繞するも敢て汝の信ずる所を言ふ之れ眞理を固守すと云ふ多數の歎呼の同情に送られ敢て危險を冒すものは勇者なり、將さに沈沒せんとする船の甲版に孤立せる船長最終の救助小舟已に其船を離るゝを見兩腕を胸間に扼して暗黑の最下底に入らんとするや、激浪

巨巖彼れの身を粉碎す、然も其心は決して屈撓せざるなり、斯の如き者は之れ眞の勇者なり、基督の孤獨其豪氣なること其莊儼なること遠く世の標準の上にあり、彼は隱者的の孤獨をなすにあらず、固より人間を離れ急流の如く過ぎ去る無極を感するは頗る儼肅なる處作なり、去れども天然は彼れと語り、且同情を表はす人なきも反駁の聲とては彼れの耳に達せざるなり、故に隱者の生涯は尚聊か慰むべく樂むべきものあり、基督の孤獨に至りては群衆中の孤獨なり、世上に唯一なる彼の胸底に人間の生命の萠芽たるべき思想――孤立し、誤解され、拒絶されし思想――横はりしなり、見よ人の子は自らの剛腸を以て進む時、其心靈の上を覆ふて懸りし完き孤立の悲みの蔭を感せし時叫びて我神、我神、何ぞ我を棄て玉ふやと、之れ實に偉大絶高なる言語に非らずや。

二、自任の精神、汝等獨り我を遺して去るべしと、此時人の子は孤立することを敢て任ぜしなり、彼れ孤行せる己が思想中に自らを置き敢て世

と合することを勤めず恢て世が彼れを受くるに至るまで幾世期間と雖ども俟てり彼れは未來に眼を注ぎ決して外面の調和を勉めず衝突に説明を與へずして「われ父より出で世に臨れり、復た世を離れて父に往かんと、弟子嘗て云ひけるは汝今明かに言いて譬喩――謎――をいはずと、去れば彼れは己に多くの了解し難き謎を言ひ、而して總て説明を與へずして之れを世に遺せり、總て眞正なる行爲は之を通して貫く只纎々たる一線ありて調和の鎖を組織す、然れども神の子は彼是の間の全き調和を證明せん爲めに苦慮せず。

是れ所謂自任にして吾人が其胸底の最も深き處に横はる思想中に自らを置き、假令擧世此思想を受くる能はざるも、自からは毫も動かざるなり、而して世に反對して己れの確信する處を實行するは、之れ世に勝てるなり、我れに於て最も眞正なりと信ずるものは之れ總ての人に對して眞正なるものとし此自信自守の上に立ちて或は聞かれ、或は知ら

れ、或は同情を表せられん爲めに煩はず、而して後世萬民漸く己が保持する眞理を承認するに至り、我れ毅然として孤立するも遂に世は我を求め、我が周圍に來ることを信ずるは此れ實に獨立なるものなり、之れに反して世を逃れ只獨り其信ずる處を保持するか、又は俗人と交はり其説に從ふは決して難きことにあらざるなり、然れども世と交り而して只自己の眞心に從ひて堅實勇猛に世の上に立たんとするは基督教徒の偉大なる所以のものなりとす。

然るに世に卑怯なる者あり、彼れは決して基督の心なきものなり、彼は眞理の結果を恐れ戰々として只己れの地位を失はんことを憂ひ、世の注目、批評、反對、驚愕如何を問ふ、然り世評途説之れ常のみ、若し之れを懼るゝものは生涯一事をも成就し得るものにあらず、天父我れと共に在り又我爽に居ます、天父の聖意如何之れ吾人の思慮の要點なり、斯の如き獨立の精神は、神の事業を遂ぐるに最も必要なるものなり、若し人に

して謙遜に且莊重に我れ敢て孤行すと言ふことを學び得たるものは已に基督教徒として幾何の經驗を得たるものと云ふべし。

終りに眞正なる孤立は謙遜の德と共にあることを學べ、若し基督にして只「我能く孤立すを得」と云はゝ之れ世の傲慢自負者の言と何ぞ撰ばん然るに彼れにして「之れ天父我れと共に在るに依る」と言はゝ獨立は世の所謂獨立にあらず、自任は神に信憑することを顯はす、乞ふ眞正の謙遜と假僞の謙遜とを區別せよ、若し人にして吾人に告げて是れ我が不完全なる思想のみ、故に我れ之を信ずべからず、我は我が理性と其判斷とに憑べからず何となれば我れは取るに足らざるものなればなり、我は我眞心の主命に從はず、否之れに依頼するは是れ我が墮落せし性質の大過に非らずや、と云ふものあらば是れ決して眞正の謙遜にあらざるなり。

知らずや我衷に證明を與ふる聖靈、我等と離ゝること遠からざる神、世

に來り總ての人を照らす光は皆我と共にあることを、汝は知らざるか、汝は自然に非らざる謙遜を形くる勿れ、時としては汝の思想は神の思想たらん故に之に從はざるは神に叛くなり、然らば他の判斷と眞心とに依りて立たんとするものゝ心中謙遜なるもの何處にかある、他の判斷と眞心の泉源は何處ぞや、此泉源は已に汝に向ひて涸れ果てしか、若し他にして汝の如く自己の眞心に依頼することを拒まば、汝の聞くことを肯ぜざるものは汝自身の聲に非らずして寧ろ神の示を拒絶せることと確知するに至らん。

且夫れ英傑の言論の偉大なるものとし眞理ありとして能く吾人に依りて承認され、貴重さるゝ所以のものは他なし吾人の心に先づ認めて智慧となすに依れり、而して汝は斯の如き言論は嘗て汝の心に起りし思想の再び汝に歸り來りしものなることを感せん、然らざれば汝は決して之を直に承認することを得じ、汝言はん、我心中に横り浮びし總て

のものに付て我之を斷言する能はず、且之を斷言する程の充分なる信仰を感ぜず即ち之を言語に發する程の確信を懷く能はざりし、然り神は英傑に語りものを汝にも告げしなり、只彼等は之を信じ之を言ひ、而して彼等の衷に在る道に信任せしのみ而して汝は此等のことをなさいりき故に汝は「只之れ我が拙なき思想のみ、且我は常に孤立す」と云ふ言葉に代へて我は孤立す去れども天父我れと共に在り故に我が自己の確信を堅守するを得と云ふべし。

如何に卑怯なるものと雖、其心にして誠實なる者ならしめば斯の如き大膽なる發言をなすも決して過誤なく且危險なし、何となれば吾人は其心の高貴なる時と卑劣なる時及び、天よりの示と我が獸慾又は私利心の淵より來る聲とを明かに判別し得ればなり、サミユエルを見よ、彼れはイツセの子孫よりエリアブを撰ばんとせし人間の感情と、主が「汝彼れの容貌或は身丈の高きを見る勿れ、我れは彼れを拒めり」と言ひし

至重なる判斷とを分別するを得たり、固より斯の如き判斷力は鍛練せる品性を備ふるものゝ爲し能ふところにして常人は其心に囁く聲常に混雜し彼をして是れ自らの聲のみ神の聲に非らずとし敢て自らの思想を確守する能はず然れば誠に能く神の聲と我れの聲とを判別せんと欲せば常に絶へず誠心を以て天の聲に從ふことを勉むるを要す、基督は實に能く此區別を知れり故に彼れは其光榮ある終生「我は我が意を求めず我を送りし父の聖意を求む故に我が判斷は正し」と言ひ得しなり。

已に述べ來りし說敎より頗る單一にして、且つ意義最も深遠なる敎訓「吾人をして信仰の生涯を送らしめよ」を得よ、決して卑怯にも已れの言論に對し他人の思考信仰、批評等を窺ひ知り之を恐るゝが如きことをなす勿れ、神を信じて世を過せよ、之れ最も容易なる如くにして而も最も困難なることとなり、去れども神は汝に近し、汝は懼れなく汝自身を彼

れに任せよ、恐懼に充ちたる人心中に未だ知られざる能力あり、若し汝之に命令を與ふ時は彼れ直に立たん而して基督を棄てし如く世人男女共に汝を捨つる日來るも汝は神をして汝の能力たらしめて獨立獨行せよ、天父は汝と共にあり、彼れを仰き見よ、彼れ汝を救はん。

ヘンリー、ワルド、ビーチヤー

少しく宗教社會の事情に通ずるものならむには、曾て合衆國に於て、博愛家にして、大説教者なるビーチヤーと云へる一將星の輝きたるとを知らざるもの蓋し稀なり。氏は有名なる牧師ライマン、ビーチヤーの子也、千八百十三年に生れ、今を去る六年以前に沒す、時に年七十四。氏廿歳の時大學の業を卒へしが、當時同國に起りたりし大「リバイバル」の時、非常なる感動を受け、越へて翌年神學校に入る。始め、インヂアナポリスなる一小教會に牧師たりしが、後聘せられてブレマス教會の牧師となる。是より後氏の名聲日に益々高く、爾來四十年の間ブレマスの講壇は實に世界の講壇なりき。氏は啻に大説教家たりしのみならず、社會の大改革家、人情界の大勇將なりしなり。殊に奴隷廢止の擧の如きは、其の全幅の力を傾注せし所、今に迫て黑人の氏の名を聞く者は蕭然として襟を

正すと云ふ。氏又た煩瑣なる神學上の論辯を事とせず、一に天道を宣べ、人情を發揮するを以て任となす。固陋なる神學者往々氏を目するに異端を以てする者あり、而して氏悠々として更に關せざる也。若し夫れ氏が雷霆の辯舌に至つては、曾つて奴隷廢止反對家の巣窟なる英國マンチエスターの地方に到り、居ること、一、二ヶ月にして其地の輿論を一變したりと云ふを以ても其勢力の如何に大なりしかを察すべき也。

神の慈愛

ピーチャー

逾越の節の前にイエス此世を去りて父に歸るべき時いたれるを知り世にありし己の民を既に愛し終に至るまで是を愛せり、

（約十三〇一）

耶蘇の神性を信じ、其見へざる天の父の表現なりとする吾等は、彼の言行を通して天の父の御性質と全宇宙に渉れる其御支配に關れる智識を得る也。

耶蘇は固より神の子に在せしかども、其神性を有することを自覺し玉ひしことは、時によりて強弱ありて、終に近くに隨ひて殆むと完全の度に達しぬ、蓋し此處に記せるは是等の時のことにてある也。彼は其生涯の終に來り間もなく世を離れて天の父に還るべきを知り玉へり、是を知りつゝ、尚ほ終に至る迄其民を愛し玉ひし也。

人の其家郷を出でゝ他に行かむとするに方りては、其情愛の特に切なるを覺ふるなり。父母の恩愛は今更の如く思はれていとも尊く、是迄何とも思はざりし萬般の物事も、一として情を動かすの種とならぬはなきなり。若し此世界をもて救主の家郷なりしとし、彼が其四邊の事物に於けるは、恰も吾等が其兄弟、姉妹、兩親等に於けるが如き者なりしとすれば、彼れが最後の日に至り、是等のものに別れを告げんとするに當り、其情の如何に深く、切なるものありしかは言ふを要せざることなるべし。

是に反し、保養又は商業のために、長く遠國にありし者が再び其故郷に歸る日の來りし者とすれば如何。縱し其土地に慣れ、多くの知己朋友のあるありとも、思ひ一たび馳せて故郷の土に至る時は、其舊時の室家、父母、兄弟、姉妹のあり〳〵と眼前に現はるゝ時は、今迄の事は忘れ果て、只管故郷の天を望みて、海にも陸にも大なる喜びにて我胸の躍るを感ずるならむ。

若しイエスが他の世界を知らざりしとすれば、此地に於てより彼の朋友の他になかりしとすれば、最後の日まで彼が其弟子等に對する情愛の極めて深きものありしも怪しとするに足らざれども、若し此世を去りて其來りし處なる天の家に父の許に歸らんとするにてありしならば如何。誰か此時に當りて彼の前に現れし幻影を想像し得んや。誰か彼か入らんとする靈界の富と榮光と自由と尊貴とを想像し得んや。若し此世が彼の足臺なりしならば、其聖座は如何にぞや。其處に彼が永遠の父は在すなり、其處に彼が無限の力は回復されんとするなり。今や彼は凡て是等の榮光に復歸せんとしつゝあるなり。而して斯る間際に至るまで彼は世にありし己の民を愛し玉へりしなり。

吾等は彼の弟子等の性質と人物とを考ふる時は、神の性を有し、凡て天國の智識を有し玉へるキリストの御眼より彼等は如何なる樣に見え

たりしかを知るに苦む。試に思へ、約翰を除くの外は十二使徒の中にさへ一人の傑出したる人物もなかりしなり。彼得、雅各、約翰の三人を除きて其他の人々に就ては、たゞ其名の外は何事をも記されざるなり。彼等は啻に一の天才を有せざりし而已ならず、教育もなく、又た人世の經驗とてもなかりしなり。彼等の多くは勞働者なりき、啻に是等賤しき身分より出でたりと云ふ而已ならで、げに彼等は是等の境遇に適したるの人物にてありき、彼等は人に卓んづる一の資質をも有せざりしなり。

若し弟子等にしてマーチン、ルサーの如くフヒリップ、メランクソンの如くハムデンの如くフヒリップ、シドニーの如くワシントンの如き人物なりしならば、若くば文學界の明星なるダンテ、シエークスピヤゴエテの如き卓越非凡の天才を有する者にてありしならば、彼が是等を殘して去るに當り、如何に惜別の情に堪へざりしかは、固より想像するを得べし、然れ共彼等は皆な平々凡々の人物にてありき。主は長く彼等と

共にあり玉ひしかども此時に至るまで彼等の進歩は極めて遲々たりき。彼等は未だ慢心を除かれざりき、彼等は未だ自利心を脫する能はざりき、彼等の嫉妬心は未だ消滅せざりき、彼等の愛心は極めて乏しき者にてありき、彼等は卑劣なる野心を有したりき。曾て兄弟なる二人の弟子は基督の王國に於て他の弟子等に優りて貴き地位を得んとて、陰かに其母を以て基督に懇請したることありき。而して他の弟子等は是を聞きて甚しく立腹したりしなり。基督が弟子等と共に旅行してサマリヤの或邑に到り玉ひける時、約翰は其地の住民を焚き亡ぼすの允許を得んことを主に願ひたりき。嗟呼是れそも愛を旨とせる福音の道ならむや。主が是を退けて「汝は汝が心の如何なるかを自ら知らざるなり」と曰ひしも宜なりと謂つ可し。彼等が主と共に在りし間の顏ぶる久しかりしに拘らず、其變化の極めて少かりしは概ね斯の如くなりき。

基督と共にありし人物は斯くの如き者にてありしなり、而して主は彼

等の器量、彼等の才幹、彼等の性質、彼等が道德の程度を熟知し玉ひたりき。而して終りに至るまで、是等の人々を深く愛し玉ひしなり。是等の平凡なる無學なる卑賤なる、而かも短所と缺點と多き弟子等を愛し、是を高め、父の許に導き、榮光の國に入らしめんと勞し玉ひしなり。凡そ是等の事、もし單に基督を人として考へんには、げに麗しき事の限りと謂ふ可し。然れどもし彼が神なりしとすれば、單に麗しき事なりと云ふに止まらず、更に尊きことの知らるゝなり。即ち是れ神が此世に對して有し玉ふ愛のいと深く大なることを說明するものにあらずや。蓋し神の慈愛の人の想像する所のものより、更に深きものあるを示すなり。

其性質の愛すべきものを神が愛し玉ふことは敢て異とするに足らざる也。是れ吾等も能くなす所のものたるなり。吾等若し其德の高くして、其品性の美なる人物を目前に見ながら、是を感嘆し是を愛慕することなくんば寧ろ怪むべからずや。然れども其性質の愛すべからざるもの

を愛するは、是れ實に吾人の難んずる所たるなり。試に思へ、吾人謙遜の德たるを知るもの怎かで驕傲なるものを愛し得んや。吾人寬容を學ぶもの怎かで偏狹なるものを愛し得んや。吾人博愛を貴しとするもの、怎かで自利心に滿てるものを愛し得んや。吾人美妙を愛するもの、怎かで醜惡なるものを愛し得んや。抑も亦た貪婪なるもの、奸曲なるもの、邪惡なるものゝ如き、誰か是を愛するものあらむや。其性質に於て愛すべからざるものを愛することは實際に於て爲し得べき事なりや、是れ實に疑問也。實に疑問なりと雖も神は能く愛すべからざるものをも愛し玉ふなり。且つ人をして是れを愛するの力を得せしめ玉ふなり。是れ稱讚と不滿足との別を抹殺するものにはあらず。蓋し父母が其子女の如何に關らず、是を愛するの愛と相似たり。

子を愛するは人類一般に有する所の情なり。高尙なる愛の、秘義は實に此中に其萌芽を有する也。我等の子女を愛するは必ずしも彼等の中に

是を愛すべきの理あるにあらず、たゞ我等の心によるなり。請ふ見よ、母の腕に抱かれたる新生の嬰兒は、思想もなく、愛情もなく、想像もなく、何等の意義ある働作をもなさざるなり。然れども母は生命にかけて是を愛するにあらずや。父の其子を愛する、母の其子に於けると多少趣きを異にする所なきにあらずと雖も、亦た其子の善惡に關らず是を愛し、是れを愛するがために、往々として其の生命を危くするにあらずや。夫れ萬物の父なる神が其萬物を愛し玉ふは恰もの是の如し、彼等の完全なるがためにあらずして、たゞ神の中にある所の情によるなり。

今や秋風肅殺、木葉地に委して、森も林も皆な麻を着、灰を被れるに似たり。然れども熙々たる大陽の光は彼等を輝かし是に熱を與ふるにあらずや。北方の地滿目白皚々綠色の更に目に觸るゝものなき處に於ても、日光は豐かに其惠恩を垂るゝにあらずや。日光の照すは彼等の美なるが故にあらず、彼等のいとも美麗にして、地上に榮光の耀くは是れ大陽

中に含まれたる光と熱との故たるなり。斯の如く、神の恩惠は萬の優れたるもの美しきものより前にありて、萬ての物をして漸次其善美の域に發達せしむるなり。

吾等が子を愛する其始は皆無なる者を愛するなり。漸く成長するや、其無智、其疵弱、其粗暴、其野卑、其罪惡なるがため、屢吾等をして心配と痛苦に泣かしむるも尙ほ是を愛するなり。而して吾等の愛は常に彼等の上にありて、彼等を刺戟し、彼等を進善開發せしむるなり。神の世界に於ける亦た斯の如くにくて地上にある最下等の動物も、彼は斷へず是を導き是を開發し、漸次高等の地位に至らしめ玉ふなり。蓋し如何に卑しく、如何に價値なきものにても、神の愛し玉はぬ者とてはなきなり。夫れ神の性質は圓滿完全にして欠くる所なきなり。而して神は高き者にも、低きものにも、善きものにも、惡きものにも、彼自身の性質より無限の愛を灑ぎ玉ふなり。吾等は皆な彼の全きが如く、全くならむことを命ぜ

られたり。即ち「故に爾曹天に在ます爾曹の父の完全きが如く完全くなるべし」と云へり。天の父の完全きは即ち「彼は其日を善き者にも惡き者にも照らし雨を義き者にも義からざる者にも降らせ玉ふ」と記されたるが如し。彼の性質は何れの時、何れの處にても、萬ての者に對して愛心を有し玉ふにあるなり。されば吾等も亦た斯の如き廣く大なる愛心を有たんことを命せらるゝなり。

神の性質に就て是の如き思想を有するにより、吾等は世に對して大なる希望と慰藉を有し得るなり。吾等の思ひ一たび馳せて亞非利加洲中にある無數の生民と亞細亞洲中幾多の人類とに及び、其如何になり行くべきかを考ふる時は、吾が靈魂の重荷たるなり。また彼の極貧の民の如き無教育の輩の如き、抑も亦た囹圄にある者等の如き社會の最下層に蠢々たる多數の人民は何れに行かんとするか、また如何になるべきか。是を思へば吾等は自ら慰むるに由なきを感ず。然りと雖も是豈進歩

の途上に於ける一の階段にあらずや。世々を通じ代々を貫ぬき、限りなき神の慈愛は是等の上に止まりて變らざるなり。萬民を子とし愛み玉ふの神何とて彼等を顧み玉はざることのあるべき。夫れ神は其獨子を賜ふ程に世の人を愛し玉へるにあらずや。吾等此思想、此信仰ありて、此に始めて、再び天日を仰ぎ見るの心地ぞするなり。

人或は曰はん、斯の如きに至りては、是れ人の正義に關する觀念を減殺するものにあらずやと。決して然らざるなり。試に思へ、親の情として其子の善を爲すを見るに優るの喜びあらんや。神に於て固より然り、其聖旨は此世を正義に歸せしめんとするにあるなり。人性を高ふし、是を聖きものとならしむるにあるなり。たゝ此目的あればこそ彼は往々其愛するものを懲らしめ、其受くる所の子を鞭てり。

夫れ神は賤しきもの、貧しきもの、無きが如きものなるに拘らず、凡ての人を愛し、是をして、更に大に、更に貴く且つ善良ならしめんとし玉ふな

り。彼は人に愛すべき所なきに拘らず、たゞ彼自らの中にある無限の愛を以て彼等を愛し玉へり。彼は其愛を以て人を幸福ならしめんと望み玉へるなり。彼の愛は極めて熱切にして、且つ嚴なり。人をして正しきに歸せしめんがためには、往々にして苦痛と辛酸とを與へ玉ふなり。我等は始より終に至るまで彼の愛によりて導かれつゝあり。始めは我等に於て、愛せらるべきの資質更にあることなしと雖も、神の靈常に我等の心の上にありて働き玉ふにより、次第に進歩發達して遂に神の嘉みし玉ふ所となるなり。

神は吾等の德性の愈〻發達して、彼に似るものとなるに隨ひて愈〻吾等を嘉みし、吾等を愛し玉ふなり。吾等は斯の如く神の愛の念吾等に加はるを喜ぶと雖も、吾等は更に吾等が未だ少しの進歩發達をも見ざる前にありて、吾等を導き、吾等をして如何にして動物より人間となり、人間より天の使となるべきかを敎へ玉へる神の愛を感ぜざる能はず。吾等

は亦た凡ての處に働く此無限の力が、大陽の其光りを失ふに至るまで天の星の輝がざるに至るまで、否、世のあらん限り永遠に至りて尙ほ止まざるを思ふて深く喜ばざるを得ざるなり。

神の我等に示し玉ひし是等の事柄は、自己の脆弱と不完全のために惱む所の吾等に取りて、如何に大なる慰めぞや。吾れ思ふに、其理想の高くして、實行の是に及ばず、自ら省みて屢悲嘆に沈む所の人々の心情ほど痛はしきはなきなり。如何に多くの人々は祈禱するの勇氣なき程、己れの價値なきことを感ずるよ。如何に多くの人々は自ら責めて神の惠を受くるに足らざるを嘆ずるよ。是れ畢竟神は吾等の義によりて吾等を愛し玉ふと考ふるに由る而已、固より神は然なし玉ふなり。然れどもたゞ吾等の義によりてのみか、あゝ、然らず。更に是よりも優れるの愛、更に是よりも喜ばしき惠みあるなり。即ち吾等の情態の如何に關らず、吾等を愛し玉ふ神の愛是なり。弱き者よ愛ふる勿れ、神は弱き者を愛し玉ふ

なり。罪ある者よ、悲むを止めよ、神は罪人を棄て玉はざるなり。然れども神は人の罪を見遁がし、其庇弱を怠慢に附し玉ふことはあらざるなり。却て是を強くし、是を癒さんとし玉ふ而已。

世の人は自ら其德を建てんことを勉む、ために涙を流し祈禱をなし慾を制し、自ら守り惱みをなし、惡と戰ふ。斯の如くして遂には神よりの稱譽を受くるに足るべきか。否、否、否。嘗て世にありし最も聖き人物も、神の聖貌の光りを仰ぎ見たる時は忽ち氣を失ひ、且つ自ら汚れたる襤褸の如くなるを覺えたりき。蓋し人類中一人にても、己れの力によりて神の可しとし玉ふまでに至るものはあらざるなり、たゞ神の恩惠による而已。

請ふ一本の細針を取れ、何物か是より細微なるものあらむや。其孔の何ぞ完全なるや、其先きの何ぞ微かなるや、其全躰の何ぞ滑なるや。然れども試みに顯微鏡を取りて是を驗すれば、恰も棒の如く、其端はギザ〳〵

として粗く、全躰、上より下に至るまで歪み曲れり。世上最も聖く、最も完全なる人物、例へば最も大なる預言者の如き、最も尊き使徒の如き、最も勇ましき殉教者の如き、其他如何に完全なるものと雖も、一たび神の御眼に映ずる時は、是れ不完全なる罪人而已。神の是を愛し玉ふは御惠而已、彼等に優れたる所あるがためにはあらざるなり。

されば神の惠を俟ち望みて惱み勞るゝ者よ、たゞ是を信ぜよ。汝は汝のために限りなきの愛と、限りなきの救を有し玉ふものを有せり。彼は其獨子を賜ふことによりて其證據を示し玉へり。彼の言は愛と惠と好意とによりて滿てり。彼は完きものに語り玉はざる也、罪惡と過失に滿てる凡ての人に對ひて、來れ」と呼び玉へり。罪人として神の許に來るを要せざるものは一人もあらざるなり。また罪人として神の許に來り能はざるの人一人もあらざるなり、神の御情の中に凡ての人の靈魂のために住家あるなり。永遠の生命の希望は汝の智慧と力とにはあらず、たゞ

神の聖旨の中にあり、救と望は是にあるなり。

諸君の中永き年の間信徒の生涯を送り、其既往を顧みて、己が眞情の淺間しくして、實を結ぶことの少きを思ひ、果して神に受けらるゝことを得るや否やと疑ひ惑へるものもあらむ。請ふ今暫らく諸君のために、余が父の晩年に起りたりし、是に似たる經驗を語らむ。余が父はいと嚴格なる新英蘭なる「カルビム」派の學校に教育を受け玉ひけるが、常々神に受け入れらることを得るや否との疑ひを有し玉ひき。余と共にブルクリンに住み玉ひける時、數日間の沈思瞑想の後、語りて曰く、「余は極めて嚴密に自ら救はさるを得るや否やを吟味しぬ、恰も人を糺すが如く我心を糺しぬ。而して余は今に於て始めて其罪を宥るされ、救はるゝを得べしと信ずるの理由を有すと」。あゝ此老雄、五十年よりも長き間、罪惡と戰ひ善行を修し、其生涯の晩年に至りて、極めて嚴格なる吟味をなした る後、始めて自ら救はるべきを信ずるを得たりとは、是れそも何の事ぞ

や。若し更に深く更に嚴密に糺したらむには、神の律法に照して、自ら救はるべしと考へ得るもの一人もなきことを悟りしならむ、必ずや吾れ自ら省みるに汚れたる襤褸の如しと云はざるを得ざりしならむ。若し吾等救はるべしとすれば、吾等の善なるがためにはあらず、吾等を愛し、吾等のために生命を得るの望を有たしめ玉ふ神によるなり。吾れ神の惠の語の天より響くを聽く、曰く、吾れ生れば、汝等も生きんとげに吾が生命はキリストと共に神の中に隱れあるなり、吾が生命なる彼の現はれん時、吾れも亦彼れと共に現はれん。

汝己れの善ならんことを望み、己れの進歩を冀ふは可し、然れども是に依頼する勿れ。記憶せよ神の思惠は常に汝の頭上に溢れんとするを。神の愛の變らざる限り、汝のために望みあるなり。汝貧しく且つ乏しくして愈神によりて望みを有すべき也。夫れ神は世の食物なり、生命の水なり、生命の希望たる也。

聖書

ピーチャー

なんぢ學で信ずる所の事を守るべしそはなんぢ誰に由て之を學びかつ幼き時より聖書を識ることを知ればなり聖書は爾をしてキリストイエスを信ずるに因て救を得しめんために智慧を予ふるものなり聖書はみな神の默示にして教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學ばしむるに益ありこれ人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからんためなり（提太後三章十四――十七）

以上の語句の記されし時に當りて福音書の何れも未だ世に出でざりき、今日新約全書に編入しあるものゝ大部は未だ世に知られざりき、よし幾何かの教會には知られたりしとするも、必ず一般には知られざりしなり、されば「パウロ」が記せる聖書なる語は即ち單に舊約聖書を指せるものにて、其中に新約聖書を含まざるとは何人も等しく承認する所

たるなり。而して以上の語句は聖書中に於て聖書のインスピレーションに就て記せるものゝ最も著るきものなりとす。蓋し基督教社會に於て幾世幾代の間、聖書の性質、聖書の權威等に就て論辯し、殊に其インスピレーションに就て斷定する所ありしに關らず、其實聖書自身は是等の問題に關して殆むと何事をも語らざるなり。其最も顯著なるものも前に擧げたるが如きに過ぎず、而して是さへ專ら舊約全書に關するものにてあるなり、

思ふに讀者は前に擧げたる「パウロ」の語の甚だ漠然たるに氣付けるならむ、即ち單に舊約聖書は神の默示（インスピレーション）なりと云ふ而已、インスピレーションなる語によりて記者の意味する所の何れにあるやは更に知るべからざるなり。而して世人多く比喩的の語を取りて字義的の解釋をなすにより、其「吹き込む」との意を有するインスピレーションなる語を見ては、自然に、「パウロ」の意舊約全書は皆神より人に吹き込まれしものにて、

恰もミルトンの詩が彼れの腦髓より出で、クゥパーの作が彼の腦中より來れるが如きものなりと云ふにありと解するに至りたるなり。然れども吾人は聖書を研究するに舊約聖書は斯くの如き意味なるインスピレーションを受けたるものにあらざるを知るなり。試に思へ創世記と出埃及記とは歴史の書にして其中に記せる事實は尋常人智の知り得べき所にして、殊に或部分に至りては記者自らの實驗する所にかゝる、斯る事柄迄も神の直接の吹噓を其心中に注がれたるものなりと考ふることは、是れ人の智力と理性の用を無にするものと謂ふべきなり。吾人は默示（インスピレーション）と啓示（レヴレーション）との間に相違あることを知る、レヴレーションと云へば今迄隱れて知られざりし事の明にさるゝなり、然れどもインスピレーションと云へば一般に人心中に或意思感情を起さんがために神より來る所の感動、若くば歴史、道德、或は心靈上の事に關して誤謬なく眞理を世に顯はし得んがための神の指導なりと解せらる、然れども

聖書の中には聖書が斯の如きインスピレーションを受けたるものなりとのことは見出す能はざるなり。

然らば則ちパウロの意何くにあるや、他なし舊約聖書は其實用の點に於て神よりの默示を受けたるものなりと云ふなり、其起原に就て云へるにあらざる也。蓋しパウロの主意は其若き友なるテモテに左の教訓を與へんとするにありしなり、即ち「なんぢ學びて信ずる所のことを守るべし蓋なんぢ誰に由て之を學びかつ幼少より聖書を識ることを知ればなり聖書は爾をしてキリスト、イエスを信ずるに由て救を得しめん爲に智慧を予ふるものなり」と。而して序に是を布衍して「聖書はみな神の默示にして教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學ばしむるに益ありこれ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからん爲なり」と附加したるなり。即ち彼が聖書のインスピレーションを云ふは其實用を云ふものにして、其起原を論ずるに意なきを知るべきなり。

彼は如何なる目的のために聖書を默示されたるやを問ふなり、其如何なる方法にて默示されしやを問はざる也。彼は其組織又は起原を問はざる也、寧ろ其結果の如何を問ふなり。夫れ聖書の目的は神の旨と其世を導き玉ふ方法を示し人の則るべき道を明にし斯くて人を教誨し人を訓錬じて人をして其尊き品性を造らしむるにあり、斯る點に於て聖書は實に誤りなき人生の指南車たるなり、パウロは斯の如き意味に於て聖書のインスピレーションを信じたるなり、而して是れ始は舊約書に適用されたるものなりと雖も新約書に就ても亦た固より眞理たるなり。

夫れ聖書は斯の如き高貴なる目的のために人生實用の書物にして其價値は古も今も變らざるなり、されば今日の如く聖書に就きて種々の異論ありて、將さに信仰の基礎までも動かされんとするの時に當りては其用法の當否を考ふることは極めて緊要の事と謂ふべきなり。

先づ誤謬の第一を擧ぐれば即ち、聖書は文字的、理論的の意味に於て更に一の欠點も一の誤謬もなしと考ふること是なり。是れ聖書の一字一句皆直接に神の意中より出で來れる者なりと論ずるインスピレーション説より來るべき自然の結論なりとす。而して是實に人をして懷疑に陷あらしむる所以のものなりとす、何人と雖も明なる理性を有するものならむには、斯の如き意味に於て聖書を信ずることは能はざるべきなり。若し同一の事實に就て聖書記者の彼と是とが記述する所互に相衝突するが如きことあらば如何。必ずや彼等は直接に是を神より默示されたるにあらずと云ふか、否らざれば神の彼等に示し玉ふ所各異なり、而して時としては誤謬を教へ玉ふことありとせざるを得ざるなり。

請ふ試に主の懸り玉ひし十字架上に記されたりと云ふ罪標の文字に就きて是を考へ見よ。馬太の記す所、馬可の云ふ所、路可の語る所、約翰の

述ぶる所、皆各相異なれるにあらずや、是れ疑もなく各記者は是等の事柄に就きて直接に神の默示を受けたるものにあらざることを證するに足るなり、蓋し神は斯る事に就て誤謬をなし玉ふべしと思はれざるなり。

吾人は縱し聖書の記事中年月又は其他の瑣事に就て誤謬を見出すとも是がために其價値を失ふべしとは思はざるなり。元と聖書は對數表或は哲學上の記述の如きものと同樣の意味を以て完全なる書物たらむことを期したるものにあらず。されば主要根本的――國家の由て立つべく、以て一家の基となるべく以て箇人の品性の建設さるべき――の眞理に於て正確ならむには其他のことは問ふを要せざるなり。吾人は假令或人が誤りをなし、又た誤りたる談話をなせることを知るとも、尙彼れが眞實にして信ずべきの人たるを信ずるに妨げざるなり。蓋し吾人の問題は一の材木ありとせんに、是に一の疵一の節もなきや否や

と云ふにあらずして、是が鬪或は橋、或は屋梁の材として用ふるに足るや否やと云ふにあるなり。

且夫れ聖書なるものは是れ、異なりたる國民の中に於て、異なりたる人物により、異なりたる時代に於て、異なりたる目的を以て記されたる多くの書物の集合せるものにして、其布置順序の如きは殆んど偶然に定まれるものなることを考へよ。創世紀は其後に出埃及記あるべしとの考をもて書かれたるにあらず、埃及記は其後に利未記あるべしとの考をもて記されしにあらず、利未記は又た其後に民數記、或は申命記あるべしとて記されしにあらざる也。抑も亦たモーセの五卷は其次に加へられたるエズラ、ヂヘシヤ、詩篇、箴言、傳道の書、若くばイザヤ、エレミヤ、等の諸書と何等の關係をも有ちて記されしにあらざるなり、是等の諸書、の記さるゝ當時に於て、其記者等の腦中には將來是等の書物が聖書なる一卷の書物をなすに至るべしとは夢にも思ひ設けざりしなり。され

ば其間に年代或は其他瑣細の點に就て多少の支吾相違する所ありとするも更に怪むに足るものなきなり。是れ固より聖書の不可誤に就て過分なる要求をなすものに於ては承認すべからざる所ならむと雖も、而かも廣き見解を採り、聖書は宗教上道德上に關する人生主要の眞理のみを教示するものなることを信ずるものに取りては、たゞ眞理の運搬機なる聖書の此處や彼處に誤謬ありと云ふが如きことは殆んど意とするに足るものなしとす。

余若し伊太利より己が許に或高尚なる意義を表せる精巧なる一の像を送りたりとせんに、余は其像の入り來れる箱を吟味して、其上に疵のあるを發見したるがため、或は其荷造の意に滿ざるがため、或は又其像に瑣細なる欠點ありと云ふの故をもて、是を拋擲し去りたりとせば如何、實に言語に絶へたる愚者とこそ云ふべけれ。若し聖書中主要の眞理に關係なき他の點に就きて誤謬ありと云ふの理由を以て其價値を云

々するものあらば、其愚は是と異なることなきなり。

誤謬の第二は何ぞと問はゝ即ち、聖書の何れの部分も皆同一の價値ありと信ずること是也。斯くて多くの人々は其神聖なる書物なりと云ふの故をもて、各人皆其全部を取入れればならぬものと思ひて、殆むど迷信的に一度にても多く其全部を通讀せむとはするなり。

余若し海圖を取りて、リヴァプール、ニウヨーク間の航海をなすとせば、余は主として其海圖の北大西洋に關係ある部分を調べ、且つ其海岸を測量して其形勢に通ぜんことを勉むべし、其他の部分に至てはたゞ其大躰に通ずれば足れりとすべきなり。蓋し聖書は人生の海圖なり、人各其特別の情況に照らし、己れに適切の部分を採りて是れを用ふべきなり。

人或は曰はん、果して然らば汝聖書は創世紀より始めて其全部を通讀するの要なしと云ふかと。曰く時には順を追ふて是を通讀すること有

益のことたり、然れども必すしも常に斯くせざるべからざるの必要なしと云ふなり。藥舗には各人の疾に適切なる種々の藥劑あるべきなり、然れども人誰か悉く是を服用せざるべからずと云ふものあらむや。又た數千萬卷の書物を藏する書籍館に在りては、其目錄をさへ順次に通讀せむこと得て望むべからず、吾人は其中にある大半の書籍を讀まざるの故をもて書籍館を非難するの理由あるべからず、又た是を悉く讀了せんことは固より企て及ぶへきにあらざるなり。

或時ハドヴァード大學なる一青年其書籍館に來り、最下の架の中より一卷の書籍を取り出せり。書籍館の理事者は彼に語りて「恐らく君よりは余の方何れの書物が君に適せるやを熟知せるならむ」と云ひけるに、青年は答へて「イヤ余は館内の書籍を殘らず讀み盡さむと欲するなり、されば先づ最下の架より始めんとす」とぞ述べける。

或人々は聖書を讀むに於て恰も是の如き考へを有し居るなり、「余は十

年の間、毎年一度宛聖書を通讀したり」と云ひて誇るものあり。然り余は十年の間毎年一度づゝ聖書を通讀しながら、他の斯くせざる人々よりも聖書を知らざる人々のあるを知るなり。思ふに彼等は何等の確たる目的もなく、たゞ迷信的に是を讀めるなり。彼等は聖書が靈魂の食物、醫藥又た教育の書たることを知らざりしなり。序を逐て是を讀むの必要なるにあらずして、人各其必需に應して是を適用すべきものなることを知らざりしなり。吾人は皆其特殊の情狀に隨ひて是に適切の部分を擇み用ふることを要するなり。例へば、余は單に想像的の目的の外には、默示錄を讀むこと殆むど稀なり。然れども感覺的の想像に滿ち、夢の如く、繪畫の如き漠然たることを好む亞非利加人の女子にありては、「妾が聖書の中に於て最も愛讀するものは即ち默示錄にてあり、是れ妾が最も能く理解し得る所なるが故なり」と云はむ。批評家の爲めには躓く石たるもの彼女に取りては最良の食物たり。翼、角、獸、喇叭、雷、電、卷物、幻影

等、――彼女が滋養を得べき所は斯の如き事物の範圍の中にあるなり。人各其位置情實によりて擇ぶ所を異にするなり、或者は常に福音書を愛讀し。或者は他の書冊よりもパウロの書翰を好み、或者はパウロの書にあらざる希伯來書を擇び、又た或者は聖書の歴史的の部分を喜び、而して小兒は皆な聖書中の物語を嗜好するなり。

斯くの如くにして聖書は何人にも適合することを得べきなり、少年にも、中年のものにも、老年のものにも、又た富貴のものにも、貧賤のものにも等しく適することを得べし。富み榮へて生活に不足なく、身躰健全にして少しの苦痛をも覺えざるものにありては、詩篇を讀みて感ずることも少からむ、然れども悲風に惱まされ、慘雨に苦められて隱家を求むるものに取りては、是れ如何に幸なる避場なるぞや。凡て人の心の如何なる狀も、又人生の如何なる出來事も、聖書によりて慰藉と助力とを得ざるはなきなり。人或は其矢釜敷批評によりて聖書を粉碎にすること

を得ん、又た福音書に於ける信仰を亡ぼすことをも得べし。然れども是を人の靈魂の要求を充たすの書物として各人の前に持ち來る時に於ては、何人も滿足せざることと能はざる也。實に此點に於て聖書の力は世にあらゆる凡ての書物の上に優に超絶するものたるを知るなり。

偖其次に聖書をば辯論の用に供すべきものゝ如く思ひて、是を讀むことは實に甚だしき僻事とこそ云ふべけれ。請ふ聖書を取りて、其神の聖語の如何に和らかなるかを見よ、基督の生涯の如何に愛と、謙遜と柔和とにて滿てるかを思へ。而して是等のいと尊き傳記、歴史を取り來り、是を寸々なる語句に切り分ち、是を以て或は「カルビニスト」或は「ハイ」或は「ロウ」或は「ユニテリアン」或は「ユニバサリスト」等己れより異なれる者を攻擊するの劍となし、鎗となし、矢となし、銃丸となさむと欲す。其聖書の躰面を汚し、其作られし元來の目的を無にすること亦た甚だしからずや。而して尚ほ其或敎理又は、或問題に就て何時にても反對論者に答へ

得る樣、聖語を寸斷にして準備せるの故を以て、自ら聖書に精通せりと信ずるの聖書讀者太だ多く是あるを見るなり。げに聖書は彼等のために戰爭の武器に變ぜられしなり。而して人々は是を見て彼等は聖書を正當に使用せりと考ふるこそ奇怪なれ。斯くて今日迄神學者等の下に聖書の用は敵を擊つの銃丸を見出すものとして過ぎ來りぬ、聖書より靈魂の養液を得ることゝては殆むど是なくして過ぎけり、眞に悲むべからずや。夫れ聖書は靈魂の食物なり、其疾病を癒すの藥餌なり、其痛苦を和ぐるの鎭痛劑なり是れゆめ忘るべからざることなり。幸にして今に至るまで斯の如くして聖書より養分を得たりし眞讀者の僅かにありしは、是れ敎會の亡びずして、今日に至りし所以にてあるなり。

既に述べ來れるが如く、聖書は今日迄世を導きたりしなり、世の人は恰も幼兒の母の胸によりて乳を吸ふが如く聖書によりて養はれたりしなり、多くの痛める靈魂は是によりて慰を得たりしなり。然るに吾人は

是等に關係なき事實の點に於て、其中に誤謬を見出し得るの故を以て、是を放擲するの理あるべきか。元々聖書は斯る事に就て誤なしとは述べざるなり、其中に一の誤りたる語句をも含むことなかるべしとは期せざるなり。たゞ云ふ、人をして正義を學ばしむるに益あり」と、新約も舊約も共に靈魂の救拯のために必要たるなり、人心の要求を滿たすに必要たるなり。請ふ我と共に聖書に付きて是を檢せよ、汝其中に人の良心を盲し、正邪の別を混じ、若くは人をして道義上の感念を失はしむる等のことあるを發見し得るか。始より終に至るまで是れ皆な人生に尊き意義を與へ、人をして痛苦の中に希望を有たしめ、人をして其神の子たることを感ぜしむる所以のものにあらずや。

印刷術の盛なる今日に於ては新聞雜誌、書籍の出版日々夥しく、古に在りては人の書籍を手にすることは容易のことにあらざりしも、今は如何に貧しき者と雖も能く是を所有することを得、有用の書籍は人の前

後左右に堆をなせり。而して其中には聖書に基けるもの、殊に其註解の類甚だ多し。近來人の聖書を愛讀するの情、是を古に比して大に減ずるの觀あるもの、是等の理由も其一因なりと雖も、實際如何に書物は多くありとも、聖書の代用をなすべきものは一冊もあることなきなり。聖書は凡ての書籍中の最も勝れたるものなり、今後幾世代を經過するとも復た是に過るの書物あるべしとは思はれざる也、聖書は實に上下四千年に渉る間の最も良き人の歴史と其經驗とを含めり。註解書の如きは固より用なきにあらずと雖も、其用は即ち古の註解者によりて埋沒せられたる聖書の眞意をば、再び發掘するにある而已。

思ふに世上、學者の批評によりて其の心を亂され、又是迄教へられたるインスピレーションの說に就て疑惑を懷ける者多からむ、斯る人は請ふ余が以上述べたる見解を採れ。聖書の中より汝の要するものを擇べ。而して汝が理性と想像の養分として、其靈性の必要を滿たすものとして汝自らを養へ。其インスピレーションは即ち教誨と、督責と、人をして正義を學ばしめんために與られたるものなることを思へ。汝が恰もパン若くば藥餌を用ふるが如くして是を用ゐよ。斯の如くすれば假令其權威を喋々せずとも、汝が生命と、汝が道念とは自然に是を認識すべきなり。

汝等の中聖書を愧づる青年はなきか、汝等の母が其行李の中に入れ置けるがため、自ら知らずして是に聖書を携へ來れるものはあらざるか。然れども思ふに今は汝等の心も大に變れるならむ。オー青年よ、請ふ汝の父母の支柱、又た慰藉たりしものを恥づること勿れ。請ふ汝の聖書を取り出せ、而して是をして汝の顧問又た指南車たらしめよ。余は敢て汝が何々の日に聖書の何れの章を讀まざれば罪を犯したるものなりと云ひ、汝が聖書に對して迷信的の恐怖を有つべきことを願はざる也。たゞ其生涯を清くせんと欲する者に對ひて、神の聖語に耳を傾け其教誨

10/4/36

に熟し、其眞理の中に自らを浸せとは云ふなり。

汝等の中曾て聖書を敬ひ、其教に隨ひて生を送らんと企てしも、今ははや繁忙なる世俗の業務に取圍まれ、或は其他の境遇によりて、全く其聲を聞かざるものはなきか。請ふ再び汝の聖書に來れ、此處に悲めるものゝために避場あるなり。弱き者のために助あるなり。凡て悲めるもの、虐らるゝもの、失望せるもの、惱み苦めるものよ、汝若し神の語を忘れ、此世の曠野に漂ひ出でしならば、請ふ復び汝の幼かりし時、汝が教育せられたる汝の聖書に立ち還れ。

余れ今我が指南車、我が慰藉者、我が食物なりし此書物を汝等凡てに薦む。余實に言ふべからざるの情をもて此書物を慕ふ、是れ實に貴重なる書物なり、是れ詩人の然云ふがためにあらず、我が靈魂の斯の如く云ふなり。請ふ汝等是を取りて汝の指南者となし、汝の足の燈光となせよ。斯くして汝等の全靈全心の上にいとも尊き祝福を來さしめよ。

明治二十六年七月三日印刷
仝　二十六年七月七日發行

定價一部金三拾錢

發行者　福永文之助
東京々橋區出雲町一番地

飜譯者　松尾音次郎
東京本郷區弓町二丁目一番地

仝　三上久滿三
東京本郷區弓町二丁目一番地

印刷者　島連太郎
東京々橋區西紺屋町廿六番地

發行所　警醒社書店
東京々橋區出雲町一番地

發賣所　福音社
大坂西區土佐堀三丁目三十八番屋敷

博士デール著
原田助序松尾音次郎譯
○活ける基督と四福音　定價拾錢　遞送料不要

ムーデー氏說教戸川安宅譯
○道の栞、天路　全二冊　仝　九錢　郵稅貳錢

內田不知庵主人纂譯
○鳥留好語（菊版廉美本）　仝　廿五錢　仝　六錢

星野光多編
○立德堅信談林一名日毎のちから　仝　四拾錢　仝　八錢

內村鑑三著
○基督信徒のなぐさめ（初版實切レ再版近刻）

○求安錄（近刻）

Ⓜ

020287-000-2

70-103

欧米近世大家説教集

松尾　音次郎／訳

M26

ABI-0093